

第三節 9号竪穴

1 竪穴埋土の様相と層序

9号竪穴の発掘調査では、7・8号竪穴の南東部、昭和38年度調査の地形測量図（駒井編1964：Fig.5）に記された大型の凹みの位置に発掘区を設定した。この地点では過去の測量後に二次堆積土が積み上げられていたため、現地表面では凹みが確認できない状態になっていたが、竪穴は過去の地形測量図とほぼ重なる位置で検出された。セクションベルトはグリッドの南北（33ライン）方向と東西（Xライン）方向に沿って設定した。地表の二次堆積土を除くと、住居床面までの埋土の厚さは住居中央部・壁際とも約60cmであった。竪穴埋土の土層堆積は以下のとおりである（竪穴埋土の基本層序であるⅠ～Ⅳ層については第一章第一節参照。ただし9号竪穴埋土では、基本土層のⅢ層に相当する土層が他の竪穴とは異なり、Ⅱ層より暗い色調を呈していた）。

Fig.98：a-bライン（1～15が9c号・9b号の埋土、16～25が9a号の埋土、26～28は竪穴外の土層）

- 1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（Ⅰ層）。
- 2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（Ⅱ層）。
- 2'：黒褐色土。2とほぼ同じだが、粘性がやや低く、土のしまりがより悪い。
- 3：黒褐色土。砂と炭化物を含む。基本土層のⅢ層に相当するが、他の竪穴とは異なりⅡ層よりやや暗い色調を呈する。
- 4：暗褐色土。3より色調がやや明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（Ⅳ層）。
- 5：暗褐色土。粘性がやや低い。この5と7はピットの存在を示唆しているが、ピットの時期や性格等の詳細は不明。
- 6：暗褐色土。5より色調がやや明るい。
- 7：暗褐色土。粘性がやや低い。5より色調がやや明るい。ピットの埋土と見られる（5の項を参照）。
- 8：褐色土。土のしまりが悪い。焼土粒、骨片を含む。
- 9：焼土。砂を含むが、粘性は高い。骨片が混じる。
- 10：黒色土。炭化物を多く含む。炭化材が土壌化したものとみられ、一部に木質が残る。
- 11：黒褐色土。炭化物を多く含む。
- 12：暗褐色土。炭化物を含む。
- 13：褐色土。粘土質で、やや灰色みを帯びた色調。
- 14：褐色土。粘性が低く、土のしまりが悪い。
- 15：褐色土。砂を含む。
- 16：暗褐色土。粘性が高い。重機等による転圧のためか、土が固くしまっている。
- 17：褐色土。土のしまりが悪い。動物骨、骨角器などの遺物集中を含む。

第二章 遺構各説

- 18：褐色土。17より色調がやや暗い。骨片を僅かに含む。
- 19：暗褐色土。17より土のしまりがよい。
- 20：暗褐色土。19より色調がやや明るい。
- 21：暗褐色土。20より色調がやや暗い。
- 22：暗褐色土。粘性がやや高い。色調が21より暗く、ロームブロックが混じる。
- 23：暗褐色土。粘土質で土のしまりがよい。
- 24：暗褐色土。粘性が低い。
- 25：褐色土。粘性が高く、やや赤みがかった色調。焼土粒、炭化物を含む。
- 26：黒褐色土。
- 27：黒色土。1とほぼ同じ。
- 28：暗褐色土。23とほぼ同じ。

Fig.98:c-d ライン (1～17が9c号・9b号の埋土、18～22が9a号の埋土、23～26は竪穴外の土層)

- 1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（I層）。
- 2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（II層）。
- 3：黒褐色土。砂と炭化物を含む。基本土層のIII層に相当するが、他の竪穴とは異なりII層よりやや暗い色調を呈する。
- 3'：黒褐色土。3とほぼ同じだが、粘性がやや低く、土のしまりがより悪い。
- 4：暗褐色土。3より色調がやや明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（IV層）。
- 5：明褐色土。灰を含む。
- 6：暗褐色土。4よりやや暗い色調。焼土粒、炭化物を僅かに含む。
- 7：褐色土。焼土粒、炭化物を含む。
- 8：褐色土。炭化物を含む。
- 9：焼土。やや黄色みを帯びた色調。砂を含み、粘性がやや高い。
- 10：褐色土。焼土粒を多量に含む。
- 11：暗褐色土。層の上部にロームブロック、焼土粒を含む。
- 12：暗褐色土。11とほぼ同じ。
- 13：暗褐色土。
- 14：褐色土。粘性が高い。炭化物、焼土粒を含む。
- 15：褐色土。14より色調がやや明るく、炭化物、焼土粒をより多く含む。
- 16：褐色土。粘性が高い。焼土粒、炭化物を僅かに含む。
- 17：黒色土。炭化材が土壌化したものとみられる。層の上面に焼土を含む。
- 18：黒褐色土。炭化材が土壌化したとみられる土を含む。
- 19：焼土。砂、灰を多量に含む。
- 20：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。層の上部にロームブロックを多量に含む。

- 21：褐色土。ロームブロック、焼土粒、炭化物、骨片を含む。
 22：暗褐色土。粘性が高い。
 23：褐色土。焼土粒、ロームブロックを含む。
 24：暗褐色土。植物の根、焼土を含む。
 25：暗褐色土。24よりも色調がやや明るく、粘性が高い。
 26：黄褐色ローム。層の上面に焼土粒を含む。

発掘区の北西部では、Ⅲ層中に白色火山灰が薄くまばらに堆積している部分があった。この火山灰は樽前 a 降下火山灰 (Ta-a : 1739 年降下) と考えられる。また、住居の北部壁際、六角形の頂点付近 (XVII-34 周辺) に相当する位置のⅢ層下部～Ⅳ層上面では海獣骨を中心とした動物遺体の集中が見られたが (a-b ラインの 17 層がこれに相当する)、標高は床面よりはかなり高い位置にあり、平面的にも竪穴外まで広がっていたため、9号竪穴に伴うものではないと判断した。また、XVIII-32 区周辺と XX-30 区周辺のⅢ層中ではそれぞれ直径 1m ～ 2m 程の範囲で礫群の集中が 1箇所ずつ認められたが、これら礫群の正確な時期や性格は不明であった。

9号竪穴も全面にわたって火を受けていたが、粘土の貼床及び壁材・柱材の遺存状況はそれほど良好ではなかった。貼床は、北側の一部でレンガ状に硬化している部分が遺存していたほかは、ぼろぼろに風化した状態であった。住居の壁を構成していた樹皮・板材も、竪穴北西部と南西部の壁際では炭化した状態で明瞭に遺存している部分があったが、ほかの部分では材の一部が痕跡的に認められる程度であった。

なお、9号竪穴の竪穴外、9b号および9c号竪穴の南西隅に隣接する位置 (Fig.103) から、オホーツク貼付文系の小型の土器が出土している (Fig.120)。伴う遺構等がないか周辺を確認したが、墓などの遺構の存在は確認できなかった。

(熊木俊朗)

2 竪穴住居

2-1 建て替えの概要

9号竪穴 (Fig.97、PL.36-2) は、第一章第二節の 2002 年度調査概要で述べたとおり、3回の建て替え (入れ子状の縮小) が行われていたと判断された。建て替え順序と各段階の住居の壁の位置を認定するにあたっては、炭化した壁材が遺存していた周溝のうちの最も内側のもの、すなわち最も新しい時期の壁の位置を基点として、その外側に遺存していた壁材に伴う周溝や、最も新しい周溝に切られている周溝を古い時期のものとするというように、主に炭化した壁材とそれを収めていた周溝の前後関係から判断した。これらの建て替えは住居の縮小および住居の中央を通る中心線の移動を伴っており、基本的には外側が古く内側が新しい。古い順に 9a号・9b号・9c号とすると (Fig.101・Fig.102)、最も大型の 9a号が最初に構築され、次に中心線をわずかに時計回り方向に振りつつ奥壁を縮小 (南西隅のみ張り出す) し

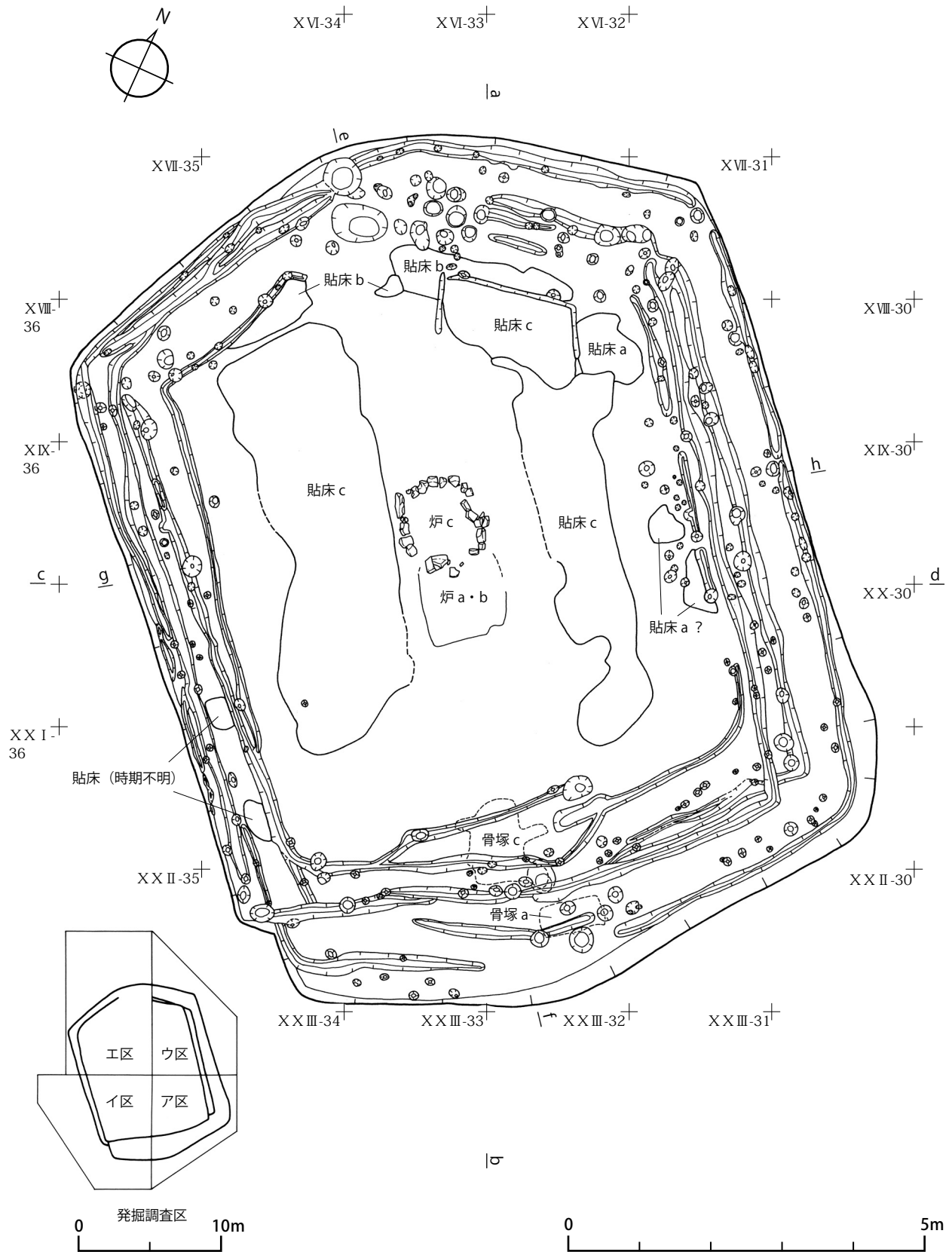


Fig. 97 9号竪穴平面図

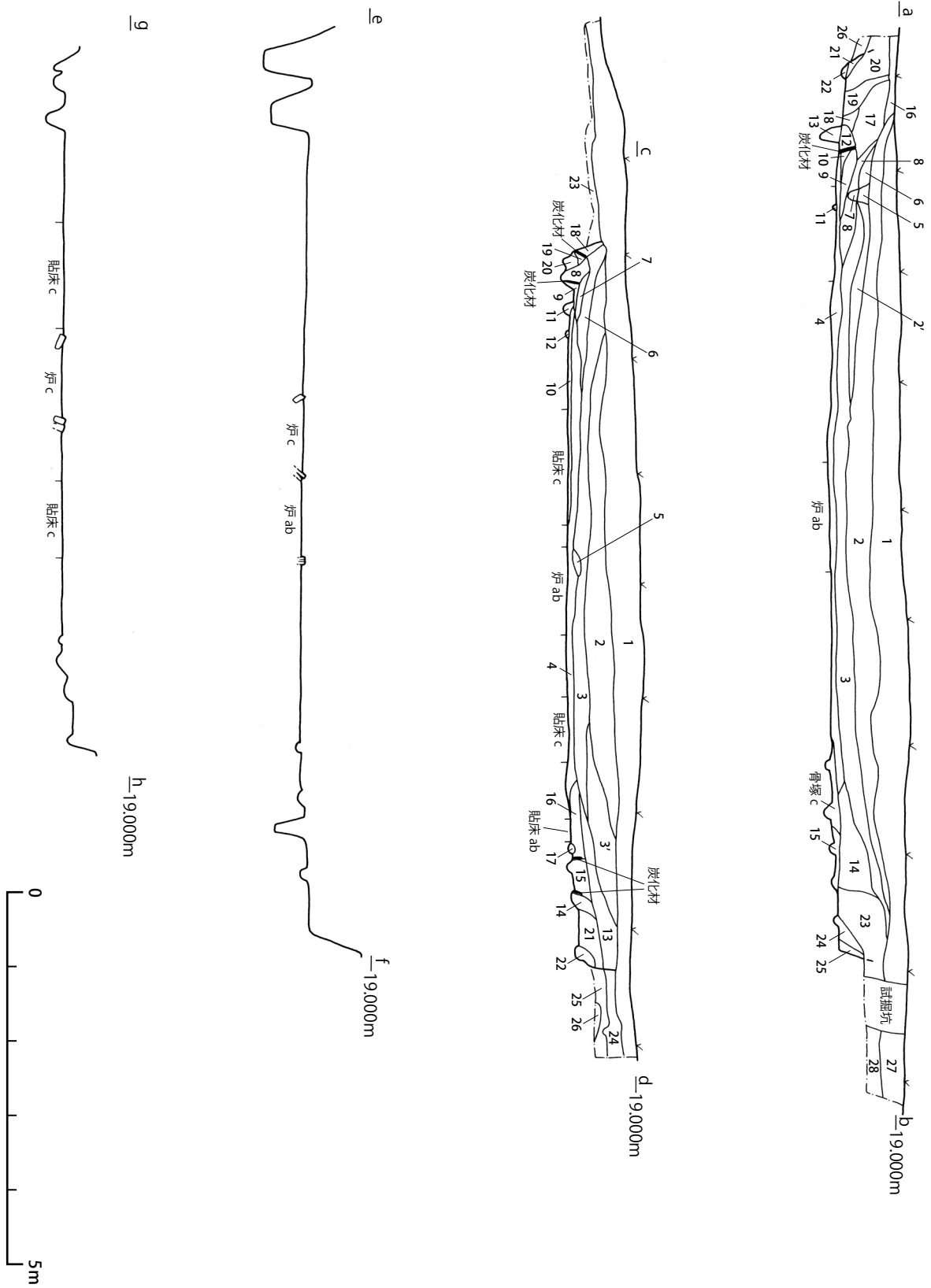


Fig. 98 9号竖穴土層図・エレベーション図

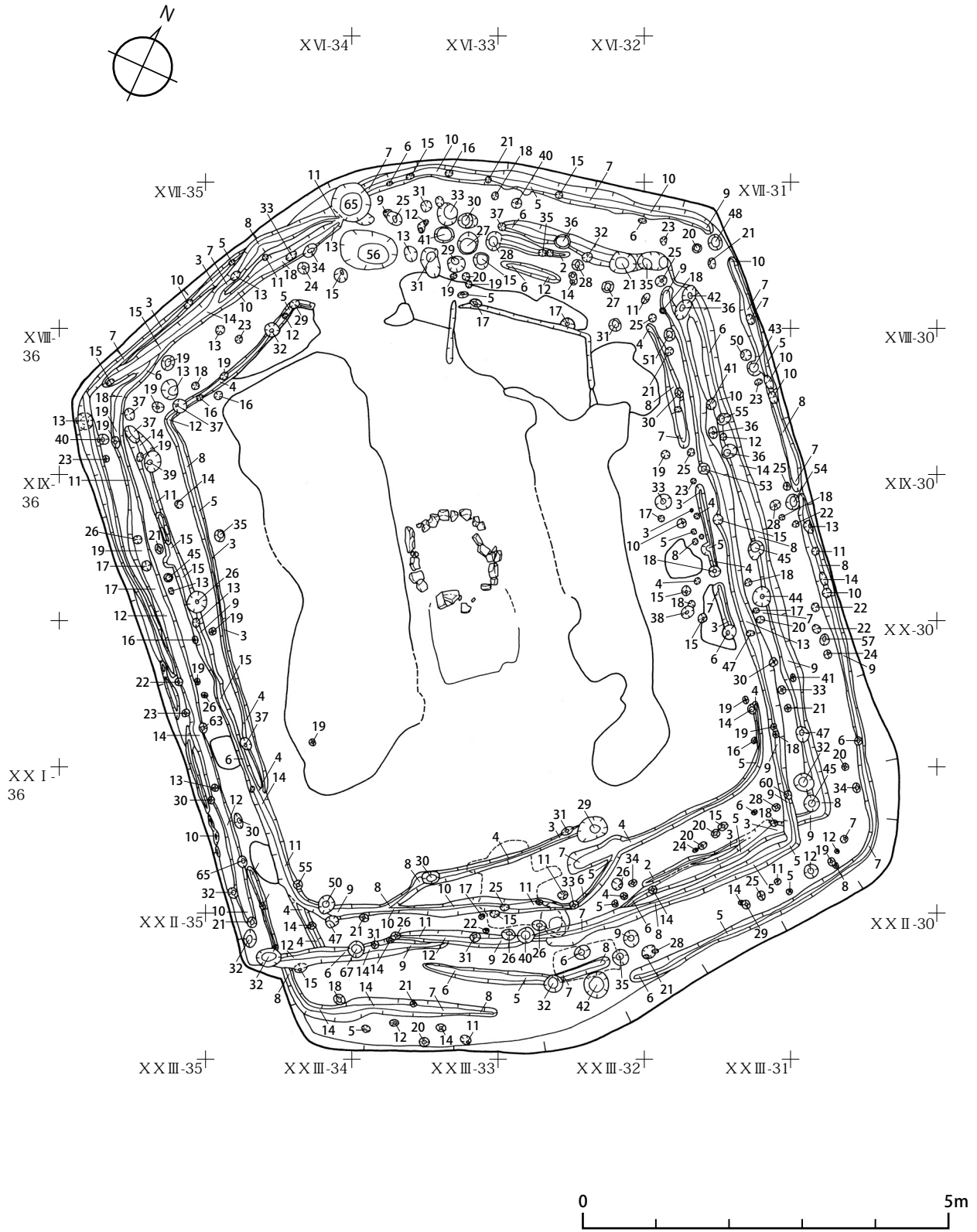
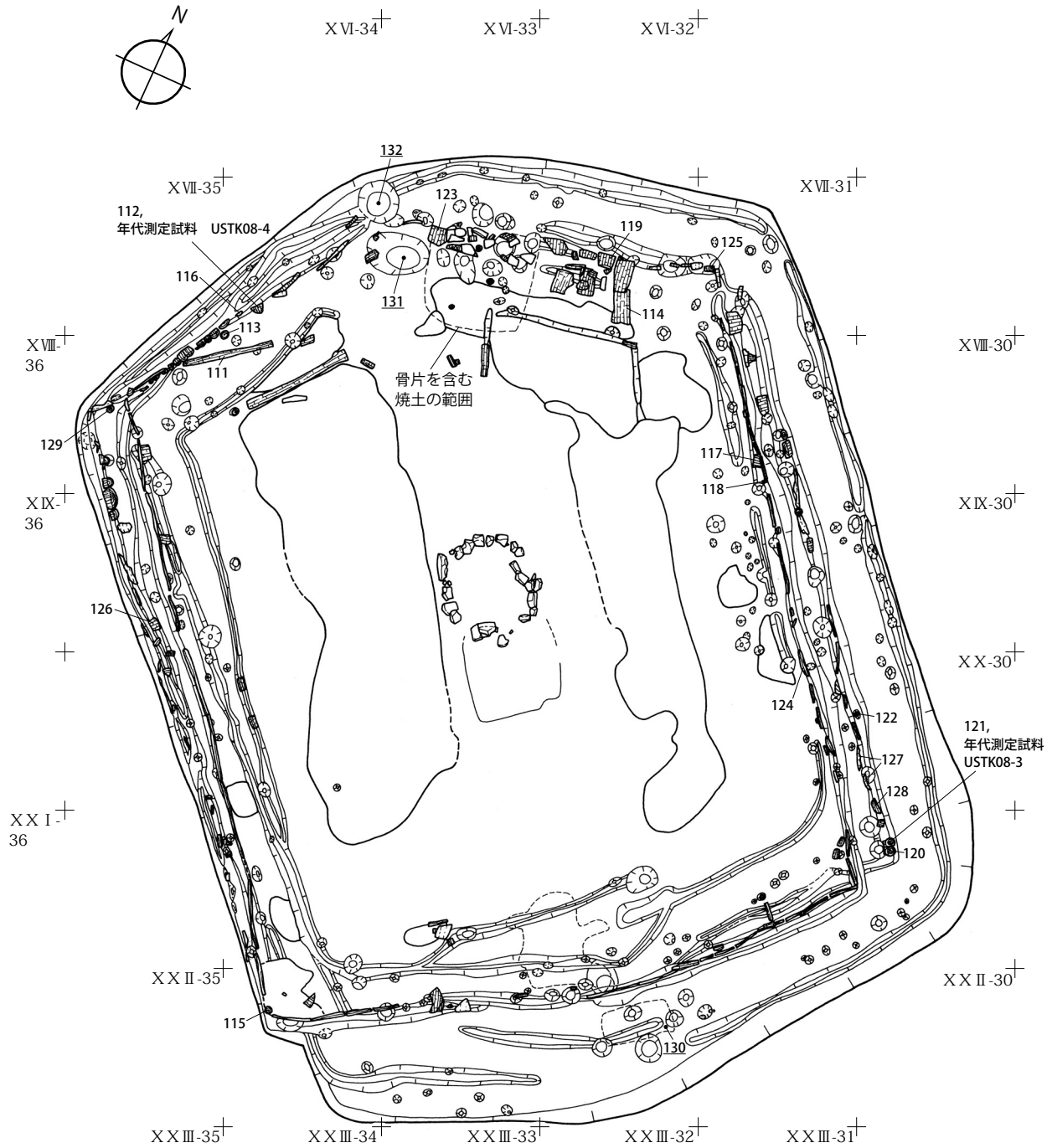


Fig. 99 9号竖穴柱穴の深さ(床面から-cm)



番号は樹種同定した炭化材のNo. (下線は出土位置のみで微細図はない)
 (第三章第八節 Table3 参照)

年代測定試料は第三章第十一節を参照



Fig. 100 9号竖穴床面の炭化材出土状況

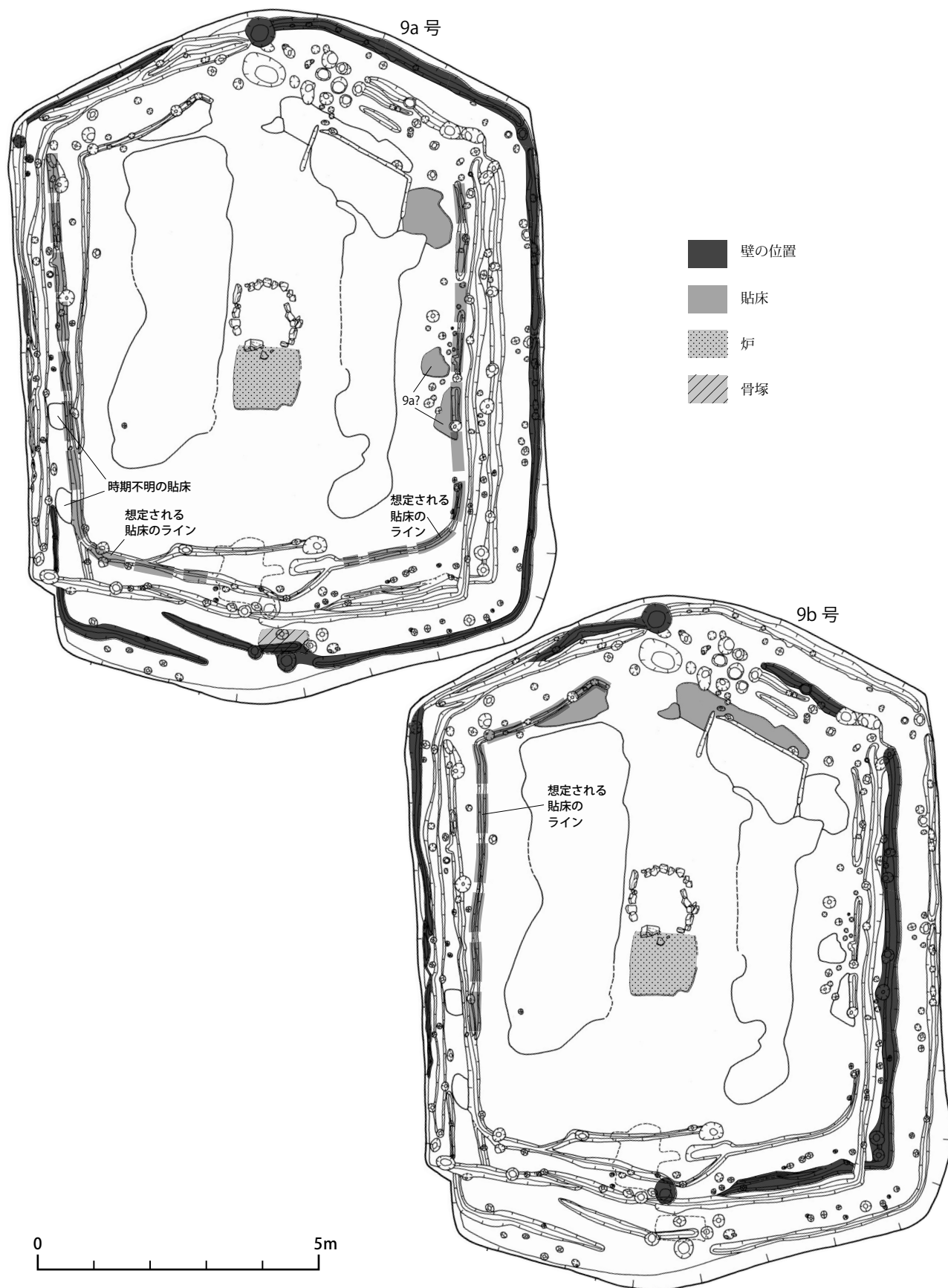


Fig. 101 9号竪穴の変遷過程1



Fig. 102 9号竖穴の変遷過程 2

て9b号を構築し、続いて9b号の中心線をさらに若干時計回り方向に回転させながらわずかに内側に縮小（南東隅部分のみ外側に拡大）して9c号に建て替えている。さらに後述のように、9a号～9c号の建て替えに合わせて貼床や炉も変更されている。以下、9a号・9b号・9c号として竖穴毎に記述する。

2-2 9a号竖穴

9a号竖穴（Fig.97、Fig.101上）は、平面形が縦に長い六角形を呈し、貼床開口部側の壁の頂点がやや強く張り出した形をしている。住居の長軸方向は北西－南東で、横方向の幅は開口部側がわずかに広く奥壁側が狭い。長軸の長さは竖穴上端で12.4m、下端で11.9mであり、短軸は下端で9.2m～8.4mである。壁の上端ラインと下端ラインを結ぶ壁の傾斜については、東隅部分ではやや大きな傾斜が認められたが、他の部分では垂直に近い状況であった。

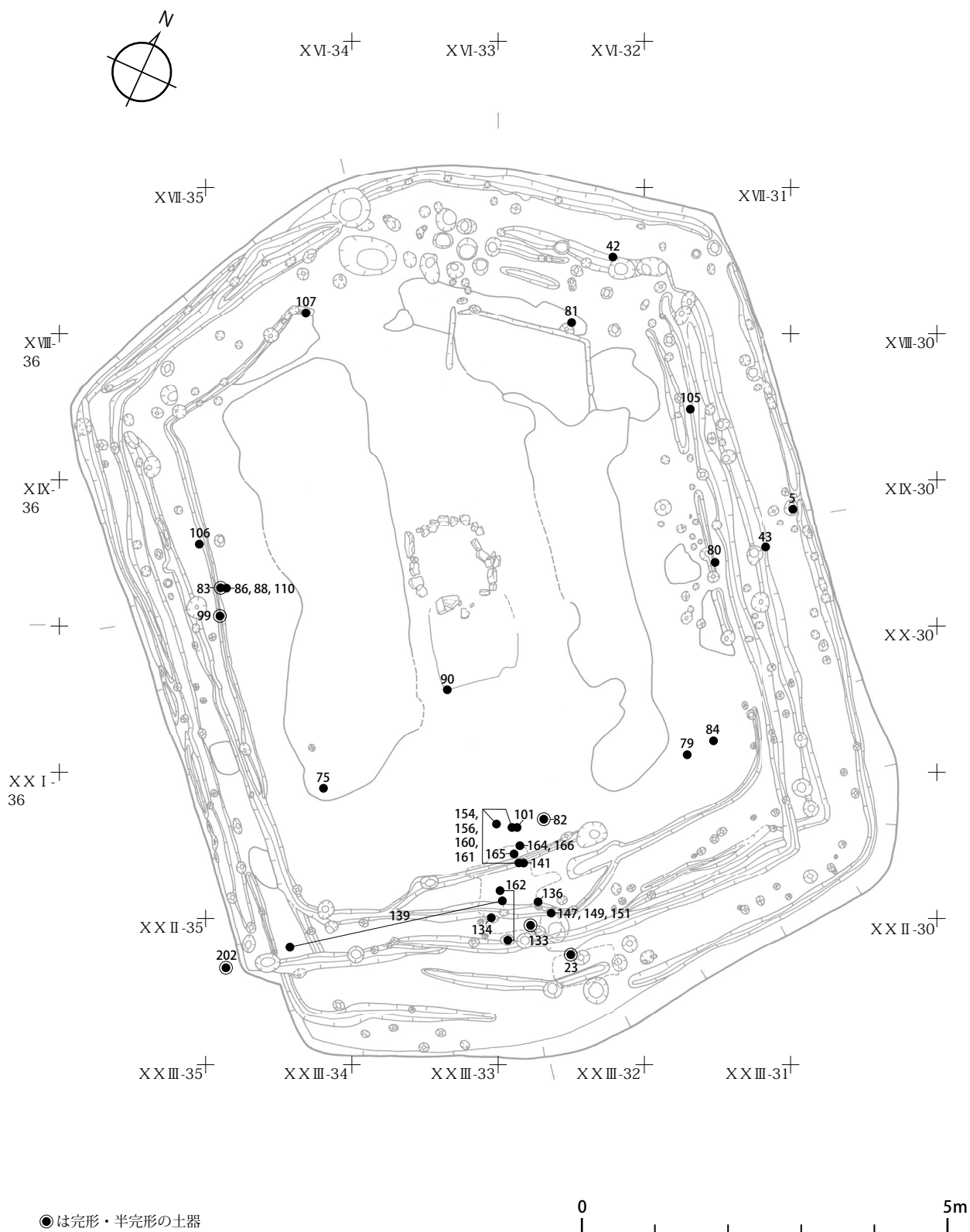


Fig. 103 9号竪穴床面・住居外出土土器分布図

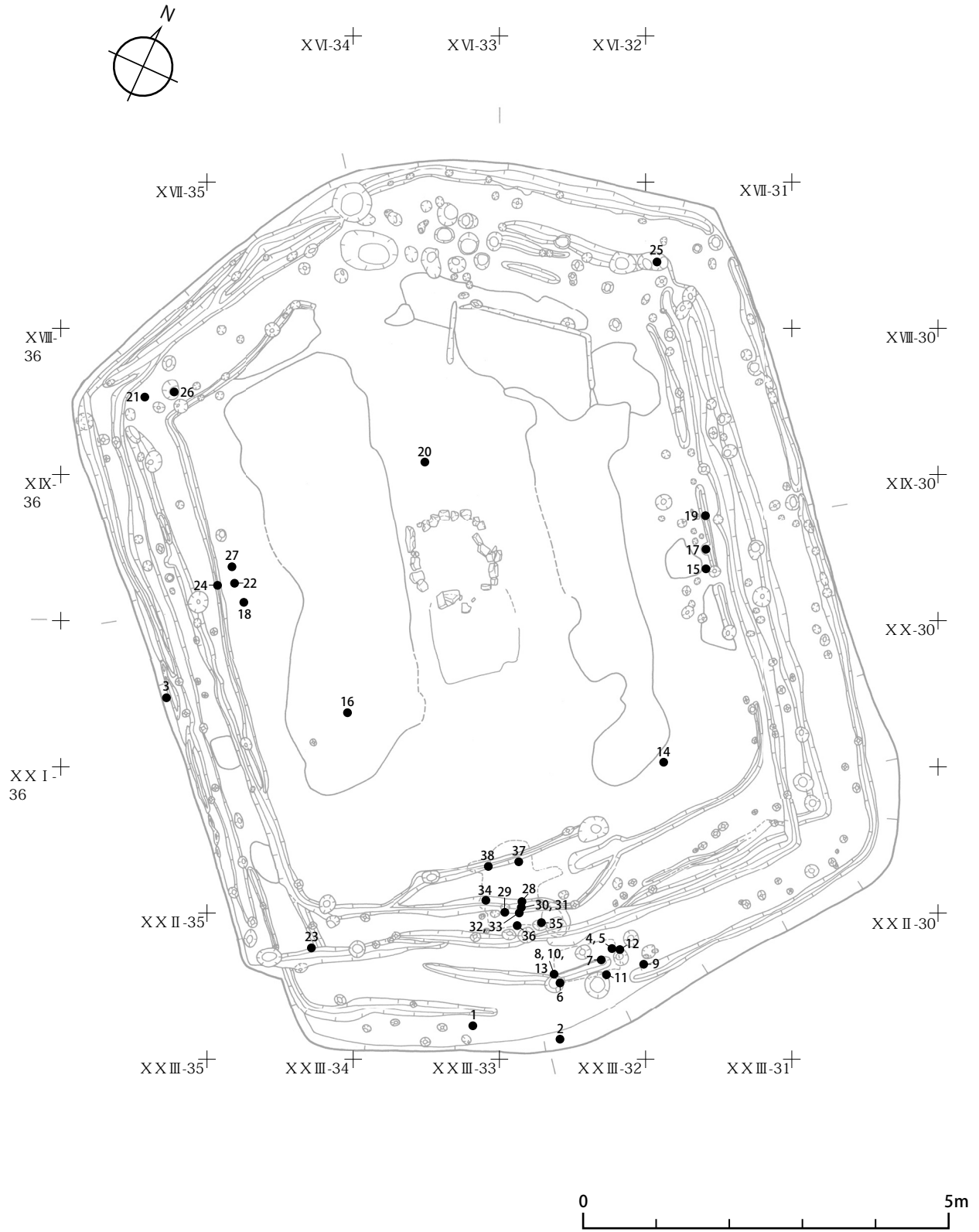


Fig. 104 9号竖穴床面出土石器分布图

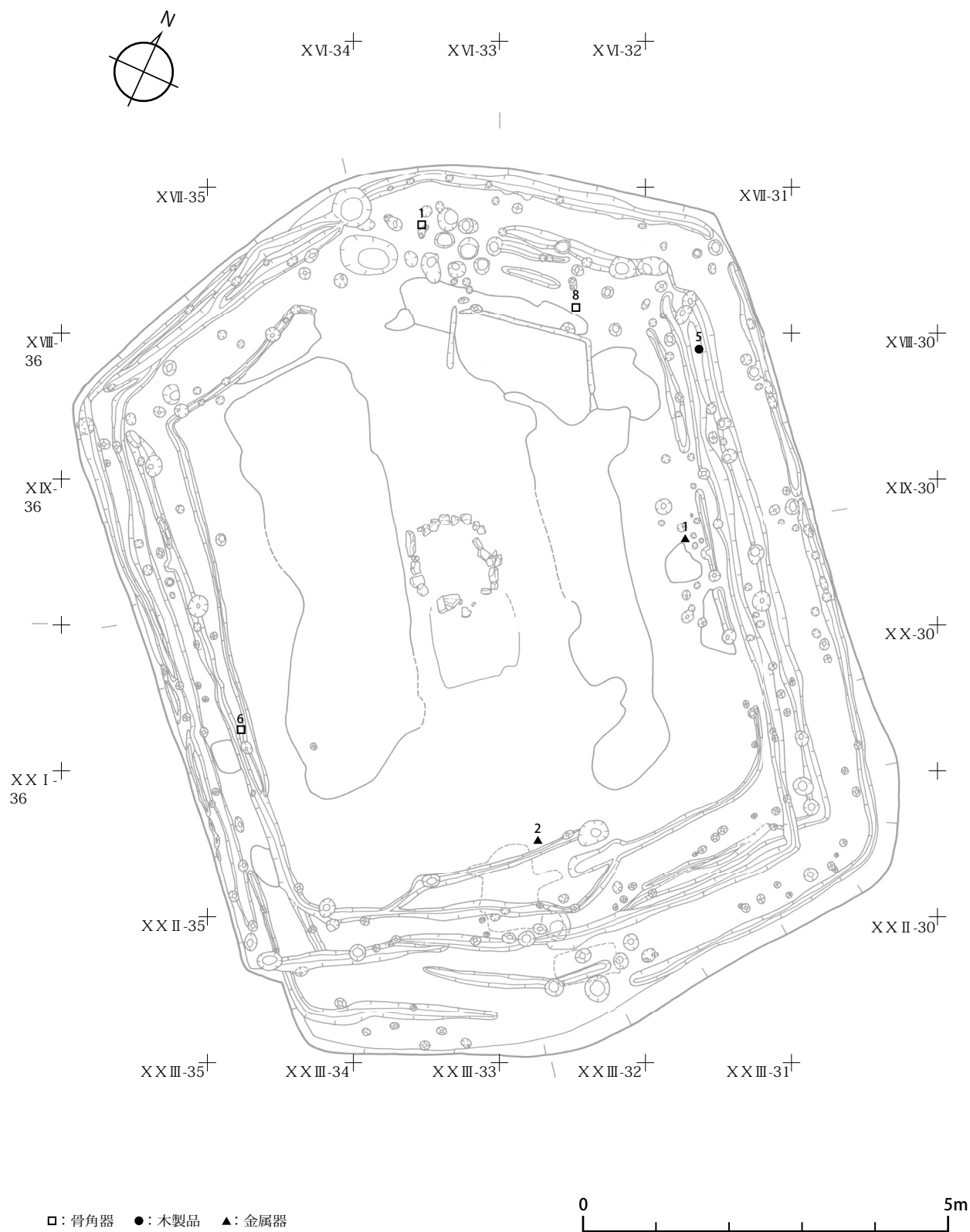


Fig. 105 9号竖穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）

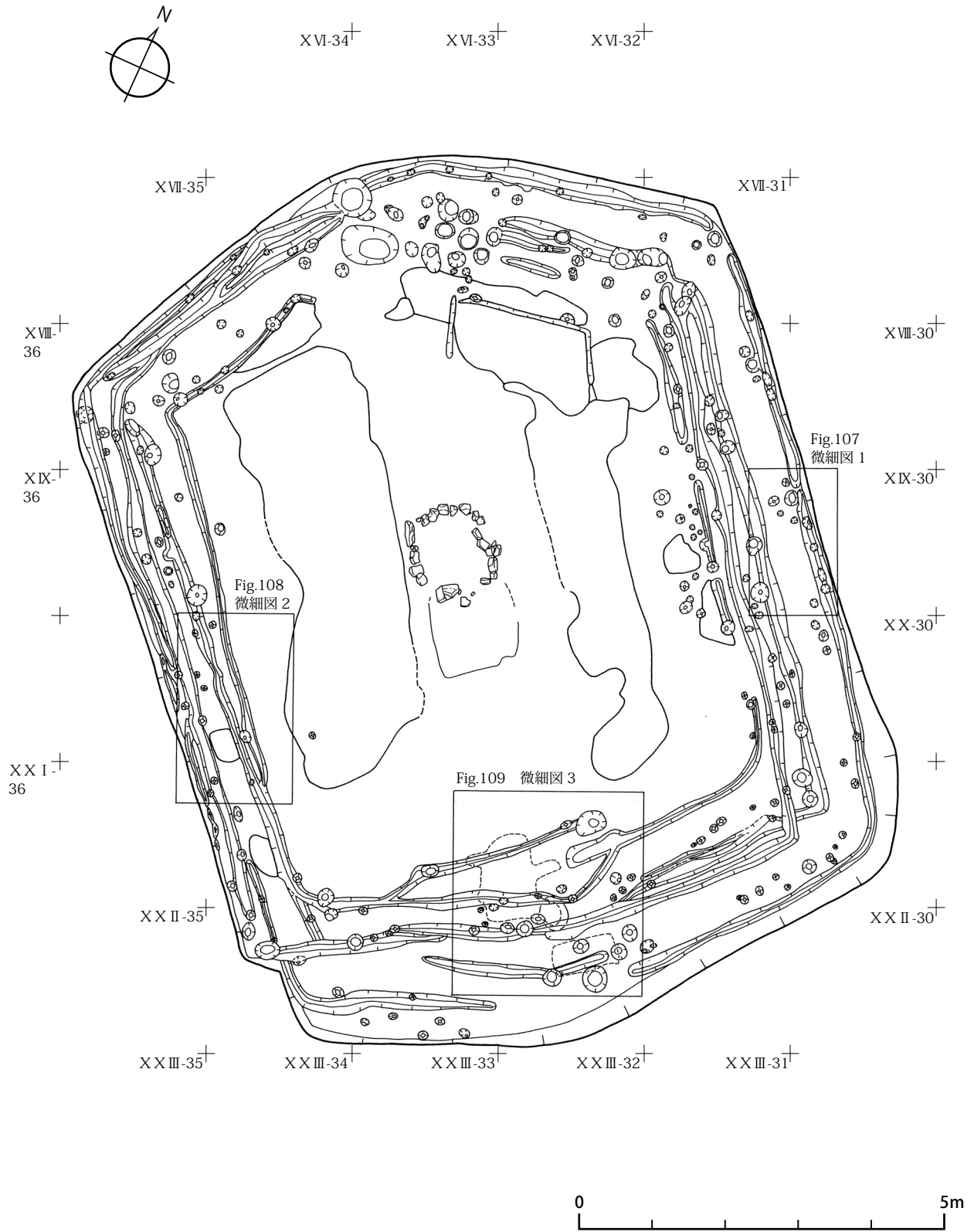


Fig. 106 9号竖穴床面の遺物等集中箇所

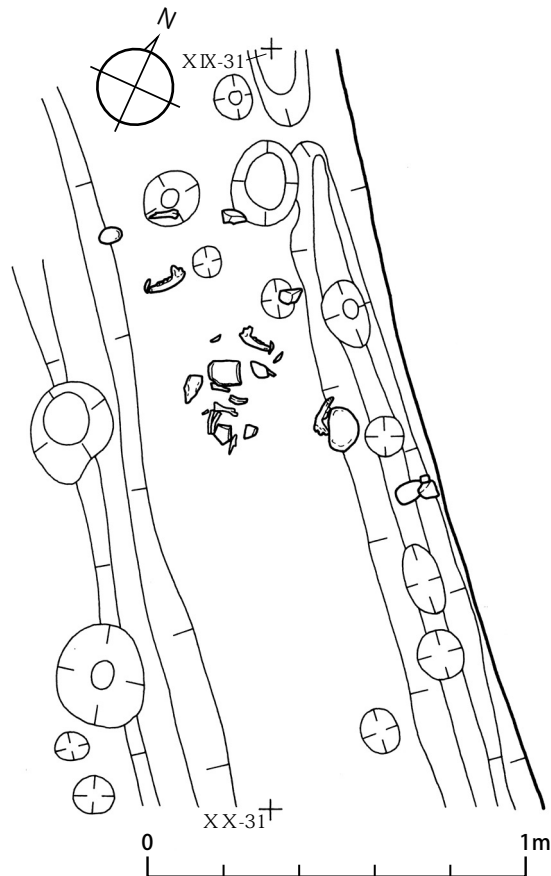


Fig. 107 9号竪穴床面の微細図1 (9a号の東壁際・骨集中)

柱穴は、住居の長軸方向の両端に大型の深い柱穴が確認された。主柱穴といえよう (Fig.101 上)。これらの主柱穴以外にも住居の壁際で多数の柱穴が検出されている。

壁際では壁材を収めていたと見られる周溝が確認されたが、住居の西側と南西側ではより新しい時期 (9b号や9c号) の周溝がほぼ同じ位置に重複して掘り直されていたため、この部分では9a号に伴う時期の周溝は部分的にしか確認できなかった。また、このように重複して周溝が掘り直されている部分では、9b号の周溝の下層に9a号の周溝の底面が残っている部分もあった。一方、奥壁の壁際、骨塚の東側付近では一部で周溝どうしがやや離れて2重になっている部分が認められた。周溝の外側に細い柱穴が存在していることとあわせて特異な構造といえるが、この部分の周溝が骨塚の下部に位置していることからみても、実際にこの周溝の位置に壁が作られていたか否かについては検討の余地があろう。

9a号の周溝の内部では、炭化材はごく少量しか遺存しておらず、壁の構造については9a号竪穴に伴う部分の周溝では観察できなかった。ただしこのような炭化材の存在や後述する骨塚aの様相にもあらわれているように、9a号竪穴も他の竪穴のように廃絶時に火を受けていることは明らかであった。

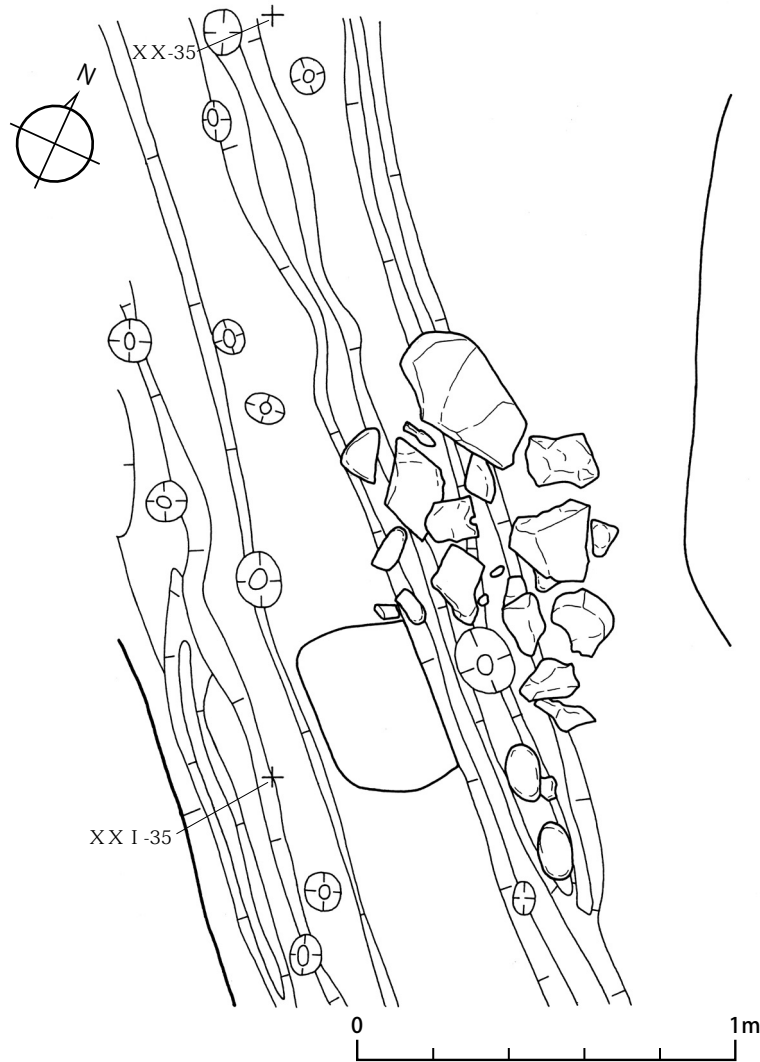


Fig. 108 9号竖穴床面の微細図2 (9c号の東壁際中央部)

貼床は、開口部の東側先端付近 (Fig.97の貼床aと貼床b、及びその両者に挟まれた部分に位置する周溝に囲まれた貼床c) でのみ、被熱してレンガ状に硬化した状態で遺存していた。この部分を観察した結果、Fig.97の貼床bと貼床cは同じ標高である一方、貼床aは貼床cより低い位置にあってその下に潜り込んでいる状況が確認された。よってこの部分の貼床は、貼床a→貼床b→周溝を切って成形し直した貼床c、という順序で改修された可能性が高いと考えられた。住居の建て替えとの対応関係については、後述する壁の位置の変化と整合させて考えると、貼床aが9a号、貼床bが9b号、貼床cが9c号に伴う可能性が高いと推測された。また、住居の東側で断片的に遺存していた2箇所の貼床 (Fig.101上で「9a？」と示されている部分) も、位置関係から見て9a号に伴う貼床の一部である可能性が高い

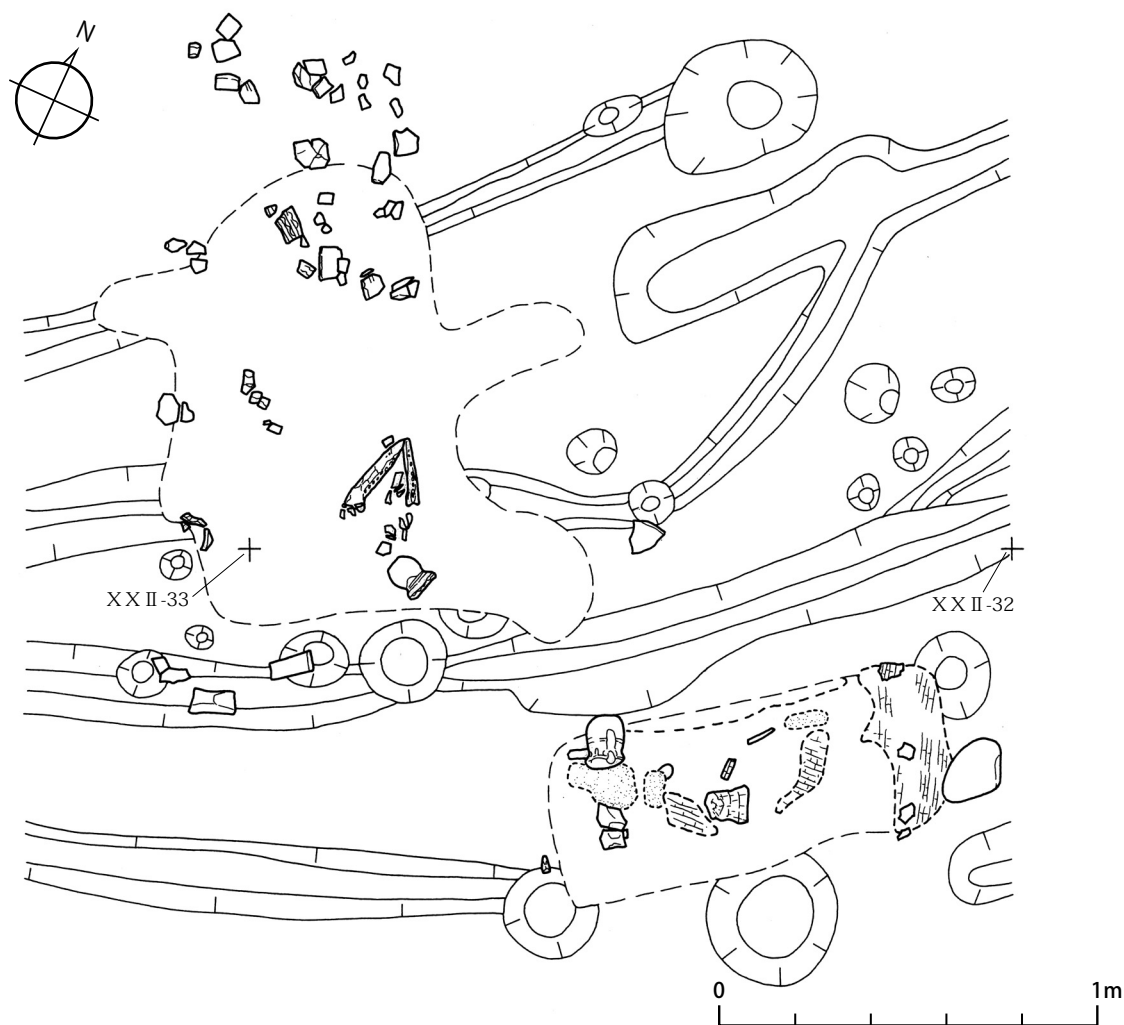


Fig. 109 9号竪穴床面の微細図3 (骨塚a・骨塚b)

と考えられる。ほかに住居の西側でも2箇所断片的な貼床が確認されているが (Fig.101 上で「時期不明の貼床」と示されている部分)、これは帰属時期が不明である。

住居の壁際やその内部をめぐる周溝には、壁材を収めたもののほか、貼床の周囲をめぐるように設けられたものがある。前述の貼床aの位置や、後述する9b号、9c号の壁に相当する周溝との位置関係から判断すると、Fig.101 上で「想定される貼床のライン」の位置にある周溝は9a号の貼床の周囲をめぐるものと推測される。この周溝に炭化材を収めていた痕跡は確認できなかったが、後述する9c号の貼床の例から類推すると、この周溝も貼床の縁の木枠を収めるための溝であった可能性が考えられる。

炉は竪穴の中央に、南北に隣接して2箇所確認された。北側の炉 (Fig.97 の炉c) は石組みで炉内に

硬化面が残るなど遺存状態が比較的よい一方、南側の炉（Fig.97の炉ab）は北側の炉よりも遺存状態が悪く、より古い時期のものと推測された。位置関係や遺存状態から判断すると炉cが9c号に伴うものであることはほぼ確実といえるが、問題は9a号と9b号に伴う炉である。炉abが炉cより南側に位置している点を重視すれば、この炉abは9a号に伴っていたもので、9b号への縮小に伴って炉も炉cの位置へと移動したと判断される。一方、炉abが炉cとほぼ同じ長軸上に位置している点を重視するならば、後述のように9a号から9b号への建て替えの際に住居の東側が大きく縮小されていることから考えて、炉abは9a号というよりむしろ9b号に伴ったものと判断されることになる¹⁾。これら双方の点を勘案した結果、炉abは9a号・9b号の両方の時期にまたがって使用されていたもので、9c号の時期に炉cへと移動したと判断した²⁾。この炉abについては、石組みは検出されなかった一方で、炭化材が炉を囲むような位置で断片的に確認された。本来は1辺1m前後の大きさの正方形で、周囲に木枠が設けられた炉であったと考えられる。この炉ab内からは海獣骨が出土している（第三章第九節参照）。これは炉abに伴ったものとみることも可能だが、炉abの空間は9c号の時期にも使用されていることから、ここでは下限となる9c号の時期に属するものとして扱っておく³⁾。

奥壁部の骨塚は9a号と9c号のそれぞれに対応して遺存していた。9a号の骨塚aは9a号と9b号の壁間、9a号の支柱穴の前面に構築されていた（Fig.109、PL.32-2）。範囲は約0.5m×1mと小規模なもので、長方形を呈しており、底面には板状の炭化材、周囲には木枠状に炭化材が残されていた。底面の下には柱穴も存在しており、おそらく木枠に囲まれた祭壇状の構造になっていたと思われる。この骨塚aの枠内からは、焼土とともに海獣骨、土器（Fig.111-22）、石器（Fig.122）や黒曜石の剥片などが出土し、さらに骨塚aの上面には完形の宇津内Ⅱb式土器（Fig.111-23）が置かれていた。いずれも骨塚aに伴うと考えられる。また、骨塚a以外にも、小規模ではあるが住居の北東部の壁際付近でキツネの下顎骨などからなる骨の集中（骨集中、Fig.107、PL.32-1）が認められた。Fig.110-5の土器は、この骨集中に伴うかたちで出土したものである。この骨集中ならびに骨塚aから出土した動物遺体の詳細については第三章第九節を参照されたい。

これらの骨塚aや骨集中以外の9a号床面出土遺物としては、土器（Fig.110）、石器（Fig.121）、骨角器（Fig.126-2～4）が出土している。9a号竪穴は9b号と9c号に切られているため、確実に9a号竪穴に伴うといえる遺物は、9号竪穴の全体から9b号と9c号竪穴を除いた部分から出土した資料のみである。点数が少なく時期の判断が難しいが、土器はオホーツク文化貼付文期が主となる一方、それよりやや古い資料（Fig.110-5）（筆者の「沈線文期」（熊木2009）に相当）が含まれている点が注目される。なお、Fig.112の土器及びFig.126-5の骨角器は、「9号竪穴の全体から9c号の部分を除いた床面から出土した」資料であり、9a号もしくは9b号の床面からの出土であるが、そのどちらの床面から出土したのかは不明である⁴⁾。これらの資料も土器はオホーツク文化貼付文期が主となっているが、やはり「沈線文期」に相当するもの（Fig.112-30）が含まれている点に注目しておきたい。

2-3 9b号竪穴

9b号竪穴 (Fig.97・Fig.101 下) は、基本的には9a号を縮小して建て替えているが、縮小の様相はやや複雑である。具体的には、北西側の壁を9a号とほぼ同じ位置に再構築する一方で南西側の隅は9a号よりわずかに外側に張り出させ、それ以外の部分の壁は9a号の内側にやや強く縮小して作り直している。9b号の平面形は五角形に近い六角形であり、長辺はほぼ並行し、開口部側の壁の頂点がやや強く張り出している。住居の長軸方向は北西-南東で、9a号と比較するとわずかに時計回りの方向に振れている。この振れは前述の南西隅の張り出しや、後述の支柱穴の位置の変化と連動したものと言える。長軸の長さは竪穴の下端で10.5m、短軸は同じく竪穴の下端で8.4mである。

9b号の壁の位置をFig.101下のように判断するにあたって最も大きな手がかりとなったのは、「外側、すなわち内側から数えて2列目の炭化した壁材の列」である。すなわち、9号竪穴ではFig.100に示したように南西側と北東側の壁で住居の壁材と見られる炭化材列がほぼ並行してそれぞれ2列ずつ確認されたのだが、これら2列のうちの外側の炭化材列(9b号に相当)を内側の炭化材列(9c号に相当)よりも古いと判断し、さらにこの外側の炭化材列よりも外側にめぐっていた周溝をもう一段階古い住居(9a号に相当)の壁と位置づける、というような方法で建て替えの順序を判断した。ちなみに住居の南西側の壁では9a号と9b号の周溝が平面的にほぼ重なっていたが、前述のように一部では9b号の周溝からわずかに外側にずれた位置に9a号の周溝が残っており(Fig.101上)、また重なっている部分においても9b号の周溝より下層に9a号の周溝が遺存している様子が一部で確認された。また、支柱穴から南西隅にかけての奥壁に相当する部分では9c号に伴うと見られる周溝(と炭化材)のみが遺存していた。おそらく、この部分では9b号の周溝を破壊する形で9c号の周溝が重複して掘られたのであろう。なお、上記のような炭化材の遺存状況からも明らかであるが、9b号竪穴も廃絶時に火を受けていた。

9b号の支柱穴は、開口部側は9a号と同じものが再利用される一方、奥壁側は9a号より内側、9a号の長軸上よりもわずかに西側にずれた位置に作り直されている(Fig.101下)。これらの支柱穴以外にも住居の壁際で多数の柱穴が検出されており、柱穴中には炭化した丸太材が遺存していたものもみられた。柱穴に関して特異なのは、開口部側の頂点の東隣である。ここでは壁材を収めていた周溝が途切れており、やや大型で深いピットが10本ほど列をなして密集していた(PL.36-1)。位置や状況からみて9b号ならびに9c号に伴うものであろう。これらのピットはおそらく柱穴とみられるが、ここに立てられた柱の構造や用途は不明である。壁を収めた周溝がこの部分で途切れている点からすると、出入口のような施設も想定されうる。

住居の壁材の構造は、主に竪穴の南西側の壁際で確認できた。基本的には7号・8号竪穴の壁と同じで、丸太の外皮部分を用いた厚さ3cm～6cmほどの板材(半割材のように外皮部分が残っている例では、外皮が竪穴の内側に向くように並べられている)を周溝内に縦に並べて壁とする構造である。壁材と壁面の間に樹皮を当てる構造も一部で確認されている。

貼床については、前述した貼床a・b・c(Fig.97)の切り合い関係から判断すると、貼床bが9b号に伴う時期のものとして推定される。この推定に従うと、長軸の西側の貼床bの外周に位置する周溝とその延

長 (Fig.101 下の「想定される貼床のライン」の位置にある周溝) は、貼床 b の縁に沿って延びていたものと考えられる。これも前述の 9a 号の例と同様、貼床 b の周囲にも木枠となる木材が収められていた可能性を示すものであろう。ただしこの周溝は貼床全体を囲うようには延びていないため、木枠の痕跡とするには疑問の余地もある。

炉は前述のとおり、炉 ab が 9a 号の時期から引き続いて利用されたと推定された。骨塚については 9b 号の時期に確実に伴うものは確認されていない。

9b 号竪穴床面の出土遺物としては、土器 (Fig.113)、木製品 (Fig.127-5) が出土している。土器はオホーツク文化貼付文期が主となる。他に、9a 号の説明で述べたとおり 9a 号もしくは 9b 号の床面から出土した土器及び骨角器があるが、これらの一部は 9b 号に伴っていたものと考えられる。

2-4 9c 号竪穴

9c 号竪穴 (Fig.97・Fig.102) は、9b 号をわずかに縮小しながら時計回りに若干回転させて建て替えられている。具体的には、奥壁側の壁を除く 3 方の壁を 9b 号のわずかに内側に作り直すとともに、住居の南東隅を 9b 号のわずかに外側 (南側) に張り出させる位置に移動させて奥壁側の壁を再構築している。壁の位置の変化を見ると時計回りに若干回転していることがわかるが、この振れは後述する長軸方向の変化や貼床の位置の変化、さらに骨塚 c の位置とも整合する。9c 号の平面形は五角形に近い六角形で、開口部側の壁の頂点がやや強く張り出しており、横方向の幅は開口部側がわずかに広い。長軸の長さは竪穴の下端で 10.4m、短軸は同じく竪穴の下端で 8.0m ~ 7.8m である。

9c 号の壁の位置を上記のように判断する際の根拠としたのは、9b 号の項でも述べたが、「最も内側の炭化材列」である。すなわち、南西側と北東側の壁でそれぞれ 2 列ずつ確認された炭化材列のうちの内側と、開口部側と奥壁側に遺存していた炭化材列とを結ぶ壁のラインを、最も新しい段階の住居、すなわち 9c 号の壁と判断したわけである。このような炭化材の遺存状況からもわかるように、9c 号竪穴も廃絶時に火を受けていたことが明らかであった。

9c 号の支柱穴は、開口部側は 9a 号・9c 号の支柱穴より内側にある大型の深い柱穴がそれに相当しよう (Fig.102)。奥壁側は、9b 号の支柱穴の南西隣にある細くて深い柱穴 (Fig.99 で深さ 40cm となっているもの) が支柱穴に相当すると思われるが、支柱穴としてはやや径が細いと言える。両脇に隣接する柱とあわせて、数本の細い柱で支える構造だったのかも知れない。これらの支柱穴以外にも住居の壁際を中心に多数の柱穴が検出されており、柱穴中には炭化した丸太材が遺存していたものもみられた。なお、9b 号の項で述べた開口部側の頂点の東隣で確認された柱穴群であるが、この柱穴群は 9c 号の時期でも引き続いて使用されたとみられる。

住居の壁材の構造は、住居の開口部側の壁際や南西側の壁際で確認できた。基本的には 9b 号の壁と同じで、丸太の外皮部分を用いた厚さ 3cm ~ 6cm ほどの板材を縦に並べて壁とする構造である。特に開口部側の壁の東側では、壁材と見られる板材が壁の内側に倒れ込んでいる様子が確認された。壁材と壁面の間に樹皮を当てる構造も確認されている。

貼床は、9a号の項で述べたように、Fig.97に「貼床c」として示した部分が9c号に伴うものと判断された。9b号に伴う貼床bと比べると、開口部の東側部分がより東の方向へと移動しているようであるが、これは前述のように壁や長軸の方向の変化と整合的である。この貼床cであるが、これも前述のように開口部の東側先端付近のみが火を受けてレンガ状に硬化して遺存していた一方で、これ以外の部分にはぼろぼろに風化しており、粘土粒が散っているような状態で痕跡が残っていたものの範囲や形状は不明瞭な状態であった。Fig.97等にはそのような痕跡を含めて貼床cの範囲を示しているが、おそらく本来は「コ」の字形を呈していたと考えられる。これら貼床cの開口部側では、貼床bとの間を区切り直すように、外周をめぐるようなかたちで周溝が切られていたが、この周溝内には板状の炭化材が遺存している部分があった（Fig.100）。9a号や9b号の貼床と同様に、貼床cの外周も木枠のようなもので囲まれていたとみられる。ただし、周溝は貼床cの全周をめぐるような形では延びておらず、「木枠」の痕跡が確認されたのは東側の開口部の貼床部分のみであった。

9c号に伴うと見られる炉は、前述のように炉cとなる（PL.34-2）。炉abとは異なり炉cは石組みで、一辺が約1.3mの正方形を呈していた。

9c号に伴う骨塚c（Fig.109、PL.35-1・2）は住居の長軸上、9c号の奥壁に接する部分に位置し、長軸方向2m×短軸方向1.3mほどの範囲で焼けた骨や土器などが堆積していた。骨は細かい骨片が散っているような状態で遺存状態は悪く、そのなかで同定できた動物遺存体はクジラ骨等の海獣類の遺体であった。9c骨塚の最下面ではヒグマの下顎骨が1体分安置されており、その傍らに小型のオホーツク貼付文系土器1個体（Fig.117-133）と石鏃が4点（Fig.124-28・30～32）伴っていた。石鏃は全て下向きに刺さったような状態で検出されており、その点からすると矢筒に入れられていた可能性が考えられるが、容器の痕跡は確認できなかった。他にも骨塚cからは土器（Fig.117・118）と石器（Fig.124）が出土している。骨塚cの動物遺体の詳細については第三章第九章を参照されたい。

他に9c号の床面で検出された遺構としては、開口部の壁際で骨片を含む焼土が約1.3m×1.3mほどの範囲で検出され（Fig.100）、また東壁の中央部では約1.5m×0.6mの範囲で角礫を主体とする礫の集中が確認された（Fig.108、PL.34-1）。前者は住居の廃絶時に形成された焼土であろう。Fig.126-1の銚頭がこの焼土に伴って出土している。後者については性格や機能は不明である。

骨塚cや焼土以外の9c号竪穴床面から出土した遺物としては、土器（Fig.114～116）、石器（Fig.123）、骨角器（Fig.126-6～8）、木製品（Fig.127-3）、鉄器（Fig.128-1～2）がある。土器はオホーツク文化貼付文期が主となる。

なお、これまでに述べた9a号・9b号・9c号竪穴のそれぞれに伴う遺物とは別に、単に「9号竪穴床面出土」として掲載している遺物（Fig.119の土器、Fig.127-2の木製品）があるが、これは、床面出土であるが平面座標の詳細な記録をとらなかったため、9a号～9c号のどの竪穴に伴うものか判別できなくなってしまった資料である。これらについては、9c号を下限とする時期の遺物として扱っておく。

（熊木俊朗）

3 遺物

3-1 土器

文様を有するオホーツク土器については第二章第五節に属性表を掲載したので、文様の詳細ならびに破片同士の接合関係についてはそちらを参照されたい。

① 9a号床面出土 (Fig.110)

1～11はオホーツク土器。1～4・6～10は貼付文系の文様、5は刻文系と貼付文系の両方の文様を有する土器である。11は底部破片。

1～4は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。5は口縁部の突帯上には刻文、胴部には貼付文が施されている。6～10は胴部破片で、6・7は文様に2本1単位の貼付文を含み、8～10は文様が1本単独の貼付文で構成されている。

12～17・20は続縄文土器。12～14は後北C₂・D式土器。15は続縄文初頭の土器で、口縁部に原体LRの縄線文とIOの刺突文が施されている。16は元町2式土器であろう。口唇部に刻み目が施されている。17は宇津内Ⅱ式とみられる胴部破片。20は無文の底部破片で、器形などの特徴からすると縄文晩期末～続縄文前半期とみられるが確言はできない。

18・19・21は縄文土器とみられる破片資料である。18は縄文晩期末～続縄文前半期とみられる胴部破片。19は胎土に繊維を含む厚手の土器。地文は原体LRLの斜縄文であろう。縄文前期の土器とみられるが型式の同定は難しい。21は胎土に繊維を多量に含む厚手の底部破片で、無文である。これも縄文前期の土器とみられるがやはり型式の同定は難しい。

② 9a号骨塚a出土 (Fig.111)

22はオホーツク貼付文系土器の胴部破片で、文様は1本単独の貼付文である。

23は続縄文土器で、宇津内Ⅱb式である。完形土器で、吊耳の片側が欠損している。底面にも縄端による刺突と縄線文が施されている。

③ 9a号ないし9b号床面出土 (Fig.112)

9c号竪穴より外側の床面から出土したもののうち、調査の初期に一括で取り上げるなどしたため、9a号・9b号のどちらに属するか不明となってしまった資料をまとめた。

24～34はオホーツク土器。24～29・31・32は貼付文系の文様、30は刻文系の文様を有する土器。33・34は底部破片である。

24・25は文様に3本以上を1単位とする貼付文、26・27は2本1単位の貼付文を含み、28・29・31・32は1本単独の貼付文で構成されている。28と29は同一個体とみられる。30は肥厚帯の下縁に先端が丸くて太い工具で施された刻文を有している。

35は続縄文土器で、縄文晩期末～続縄文前半期の底部破片である。

④ 9b号床面出土 (Fig.113)

36～58はオホーツク土器。36～44・46～51は貼付文系の文様、52は沈線文系の文様を有する。

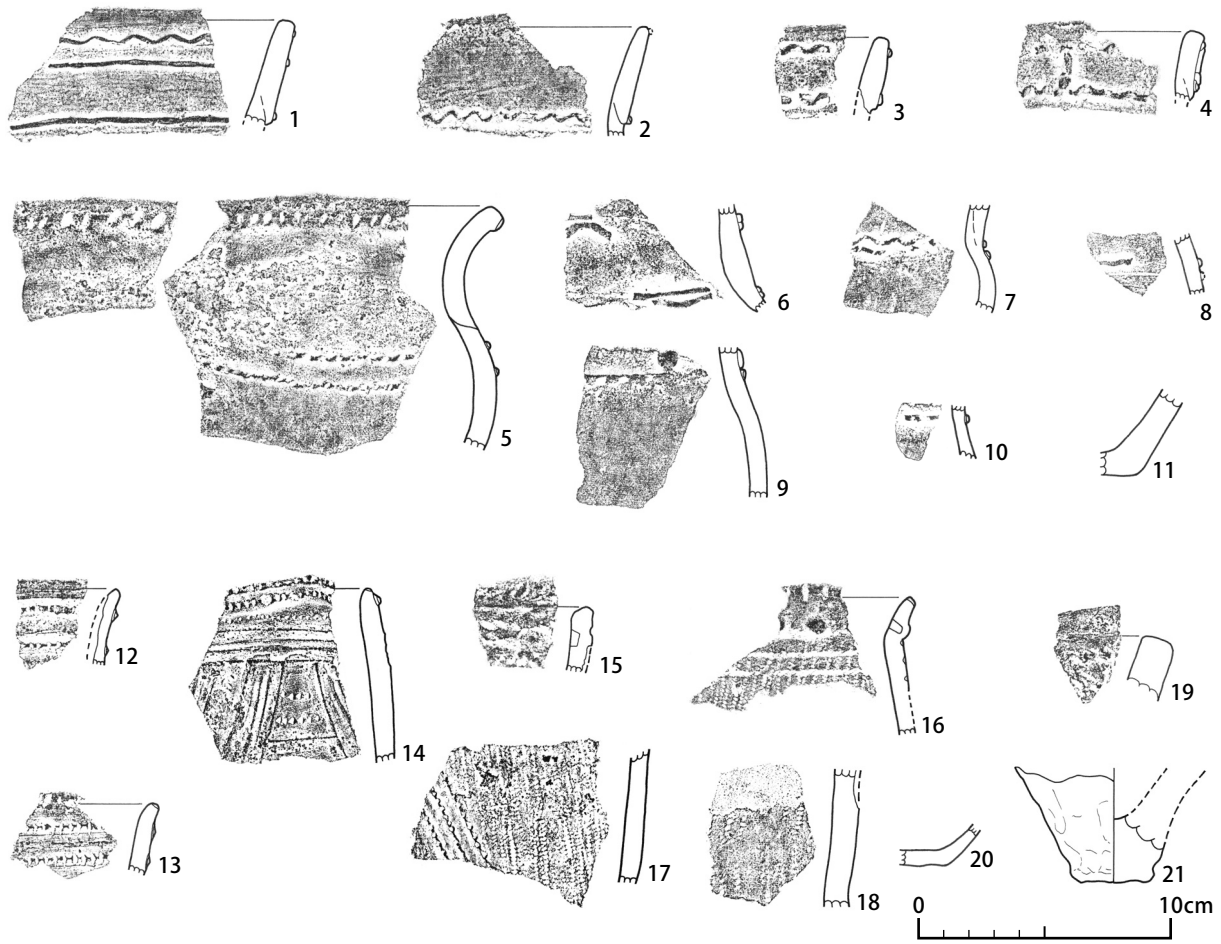


Fig. 110 9a号竪穴床面出土の土器

45は無文の土器である。53～58は底部破片。

36は文様に3本以上を1単位とする貼付文、41は2本1単位の貼付文をそれぞれ含む口縁部破片である。37～40は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片。42～44は口縁部が無文で、頸部以下にのみ貼付文系の文様を有している。44は頸部以下の文様に3本以上を1単位とする貼付文、42は2本1単位の貼付文、43は粒状の貼付文をそれぞれ含んでいる。45は遺存している部分については無文だが、細片なので詳細は不明である。46～52は胴部破片で、46は文様に3本以上を1単位とする貼付文、47・48は2本1単位の貼付文を含み、49・50は文様が1本単独の貼付文で構成されている。51は刻み目のある太い貼付文が水平及び斜めに施されている。52には沈線が2条確認できる。

59は擦文土器。胴部破片で、文様帯の下端部分に施されたものとみられる刺突文列が確認できる。

60～70は続縄文土器。60～65は後北C₂・D式土器の口縁部破片で、60・61は口縁部に刻み目のない貼付文、62～65は刻み目のある貼付文が施されている。66は宇津内Ⅱ式とみられる土器で、吊耳部

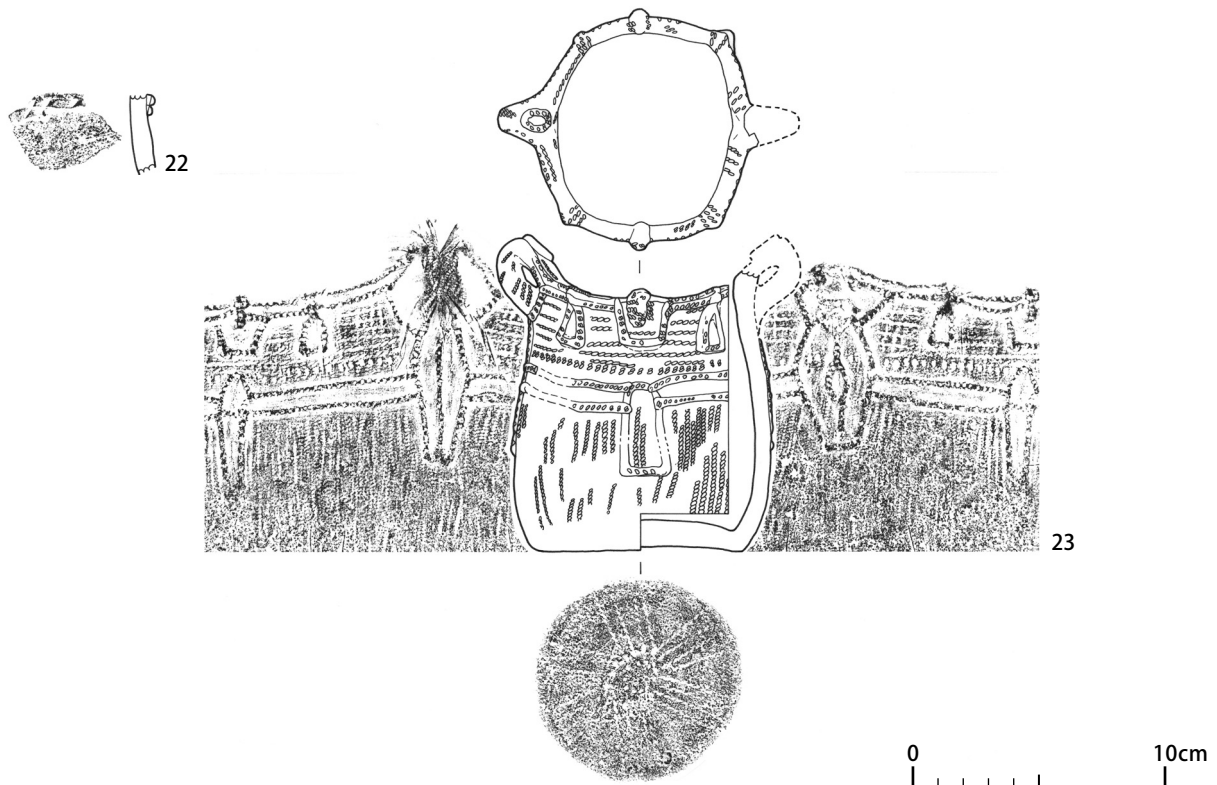


Fig. 111 9a号竪穴骨塚a出土の土器

分の破片である。67は宇津内Ⅱa式土器の口縁部破片。68は宇津内Ⅱa式もしくは元町2式土器の口縁部破片。69は続縄文初頭とみられる口縁部破片で、地文にはRLの縦走縄文、口唇部には原体Rの縄線と縄端による刻み目が施されている。70は縄文晩期末～続縄文前半期とみられる底部破片。

71は縄文土器。胎土には繊維が多く含まれ、厚手である。文様は原体がRLRとみられる縄文が横走している。縄文前期の綱文式土器であろう。

⑤ 9c号床面出土 (Fig.114～Fig.116)

72～110はオホーツク土器。72～96・100～104は貼付文系の文様を有する。97～99は無文の土器。105～110は底部破片である。

72～74・81・82は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む完形ないし口縁部破片である。75～80・83・84は文様に2本1単位の貼付文を含む完形ないし口縁部破片。85～91・93・94・96は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片で、90と91は同一個体である。92・95は口縁部が無文で頸部以下にのみ貼付文系の文様を有している。97～99の土器は遺存している部分は無文であるが、特に98については表面が剥落しており詳細不明である。100～104は胴部破片で、100は文様に3本以上を1単位とする貼付文、101・102は2本1単位の貼付文を含み、103・104は文様が1本単独の貼付文で構

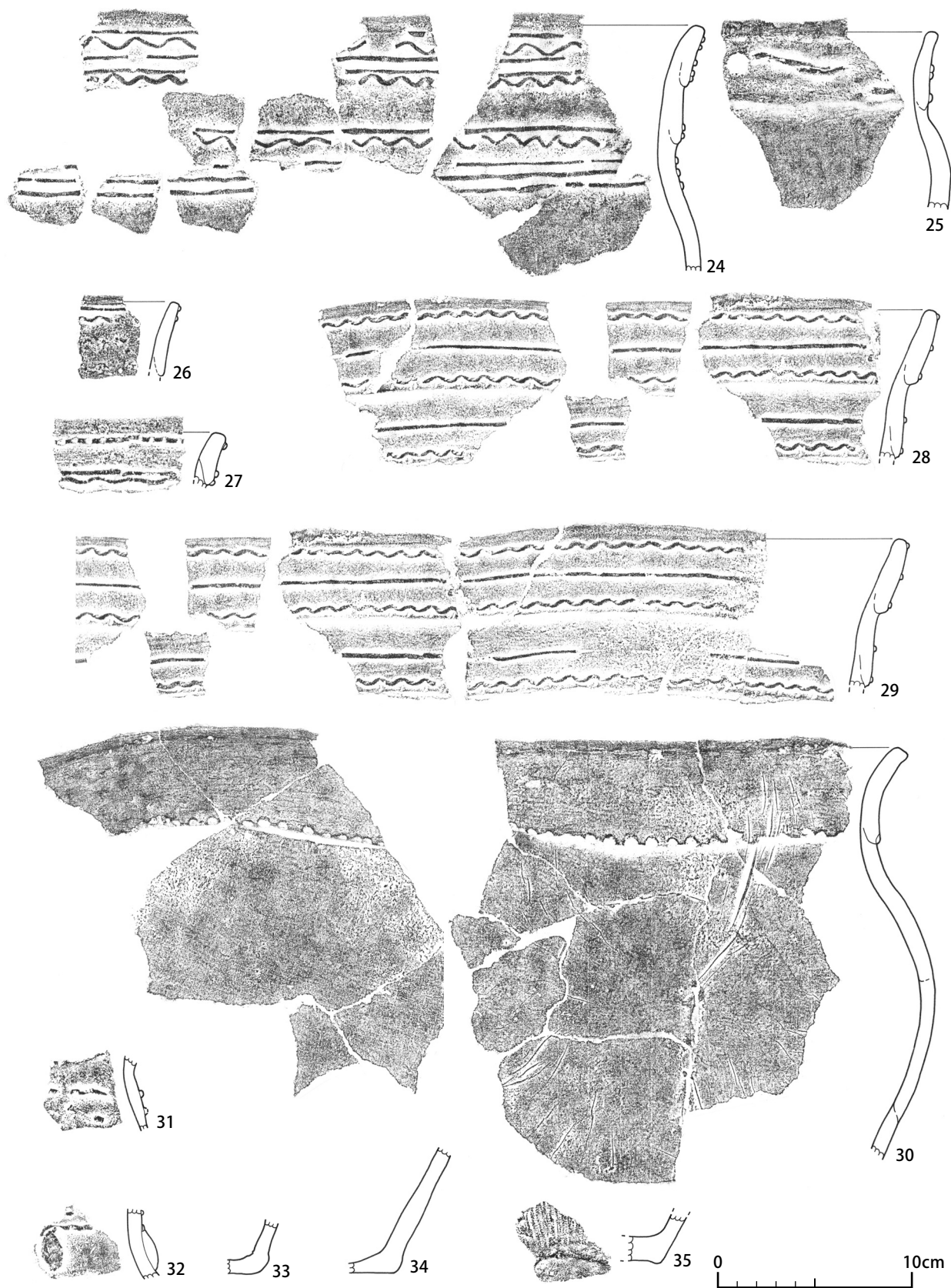


Fig. 112 9a号ないし9b号竪穴床面出土の土器

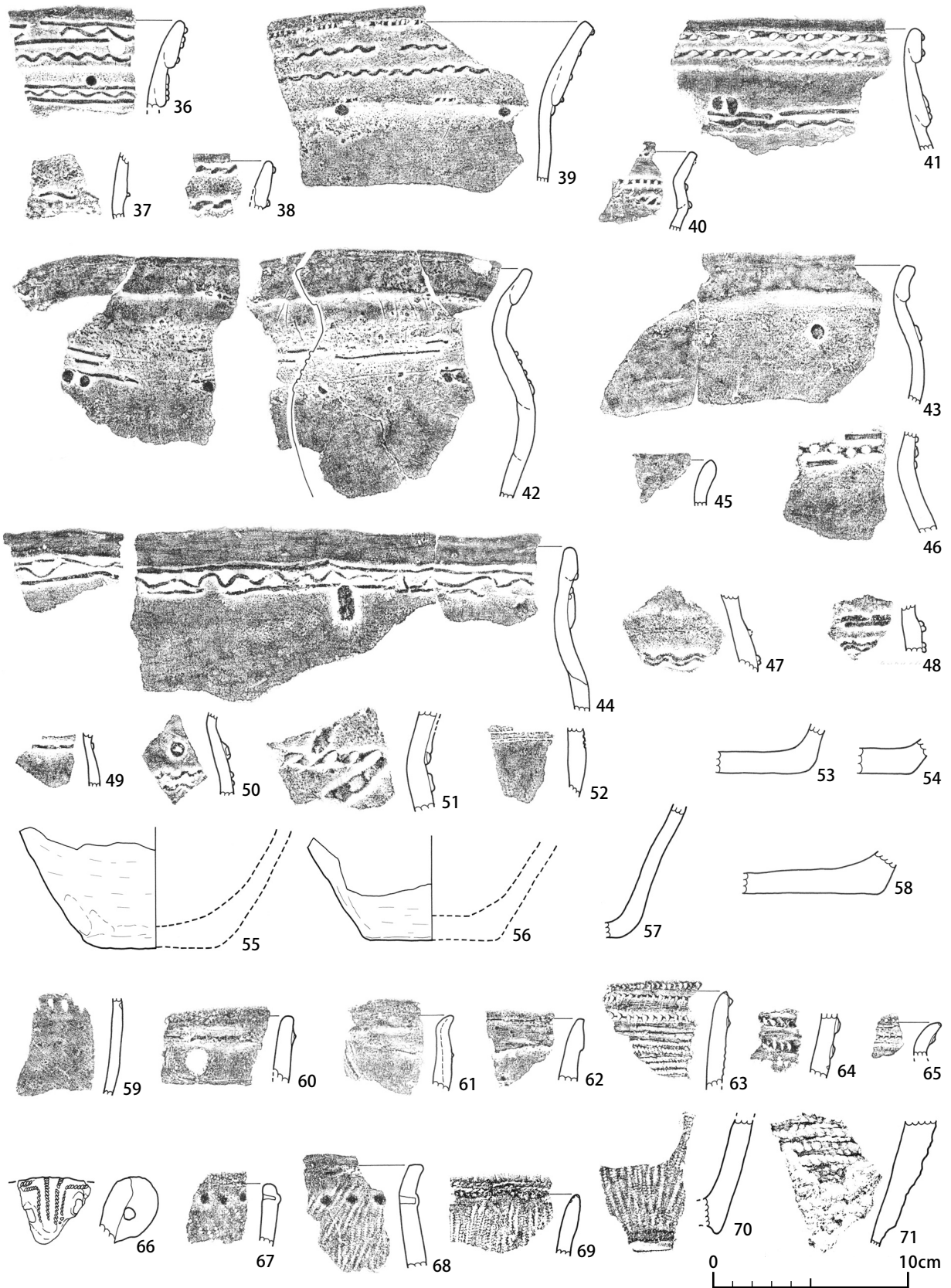


Fig. 113 9b号竖穴床面出土の土器

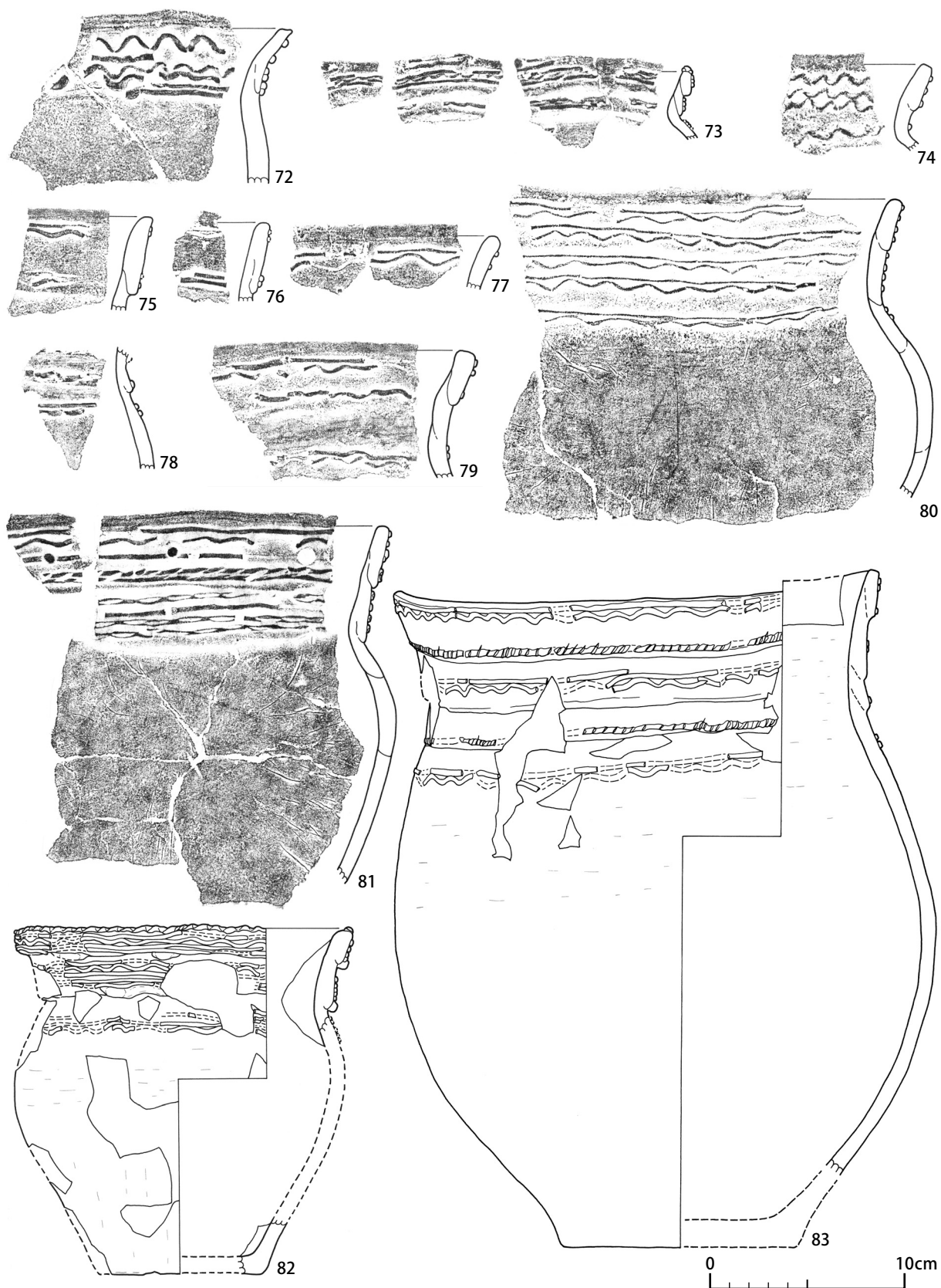


Fig. 114 9c号竪穴床面出土の土器1

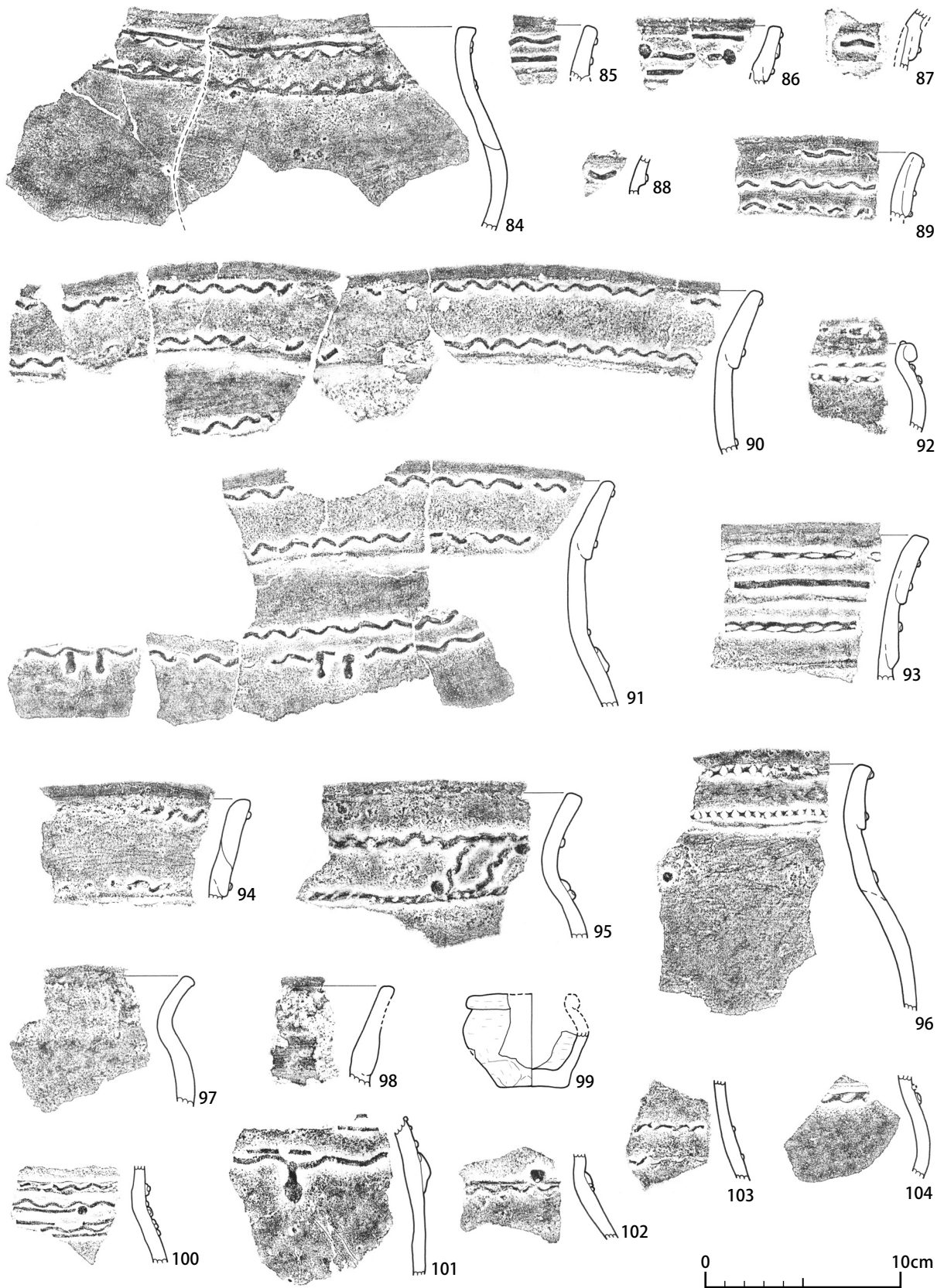


Fig. 115 9c号竖穴床面出土の土器2

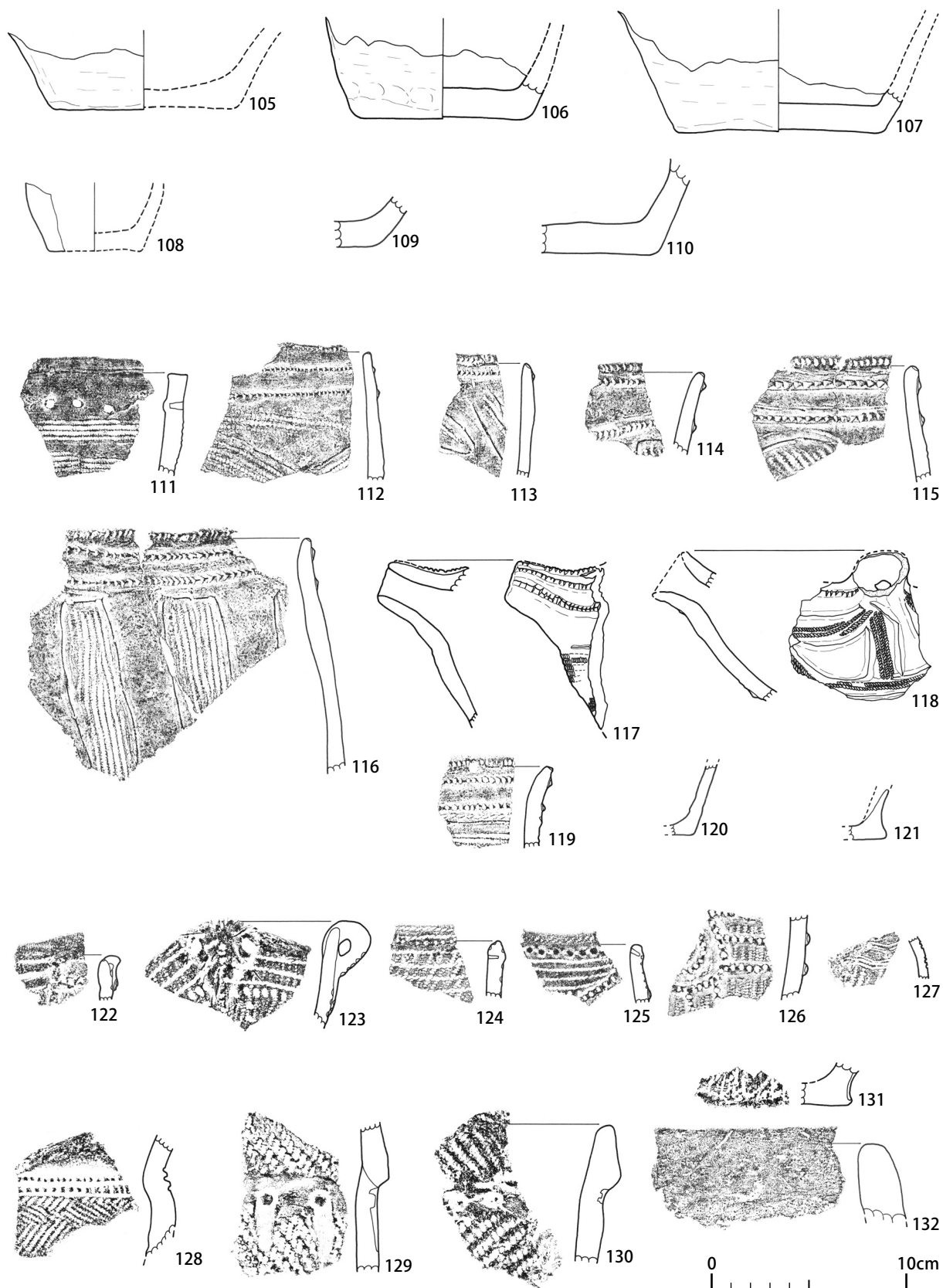


Fig. 116 9c 号竖穴床面出土の土器 3

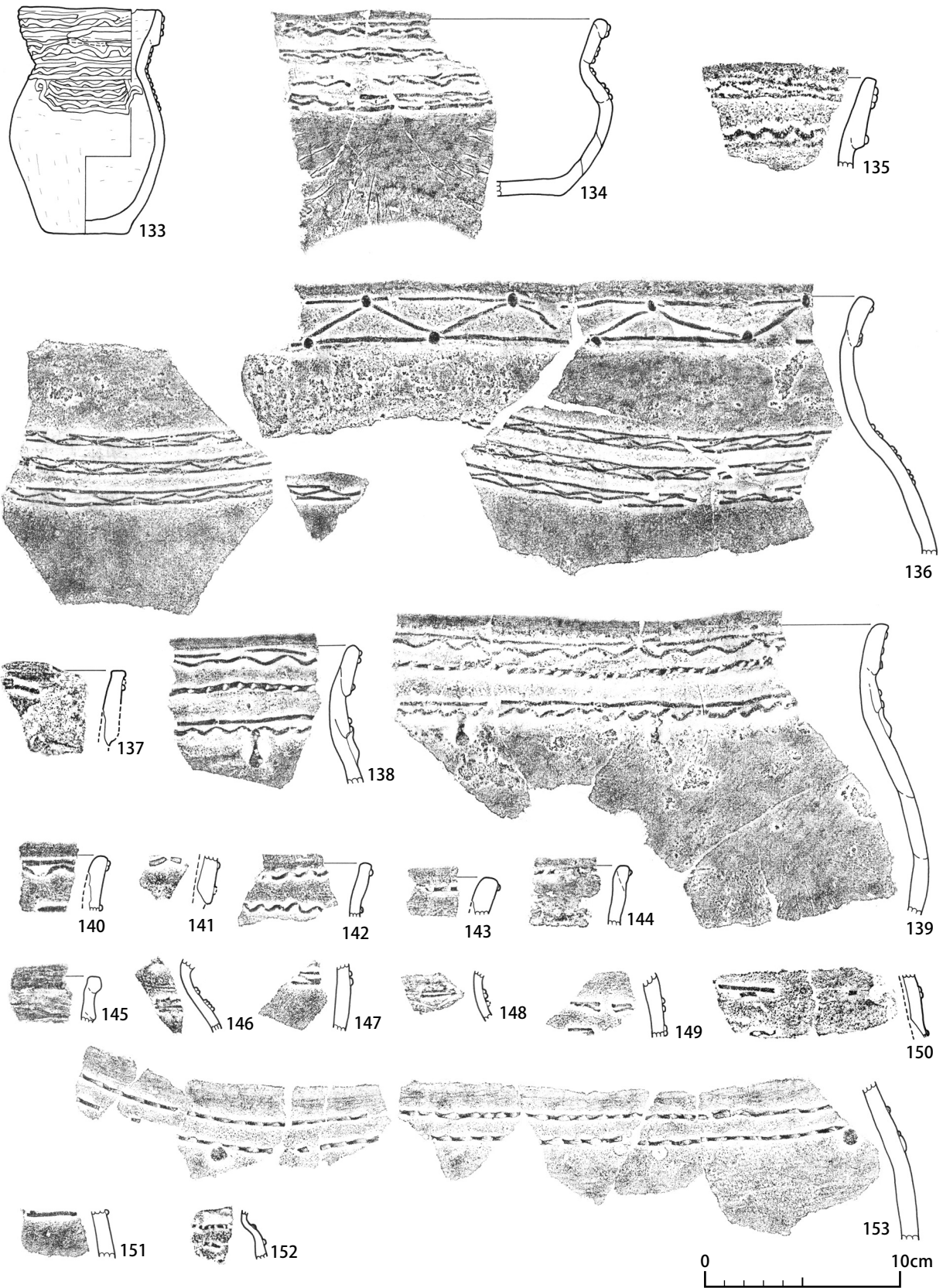


Fig. 117 9c号竖穴骨塚c出土の土器1

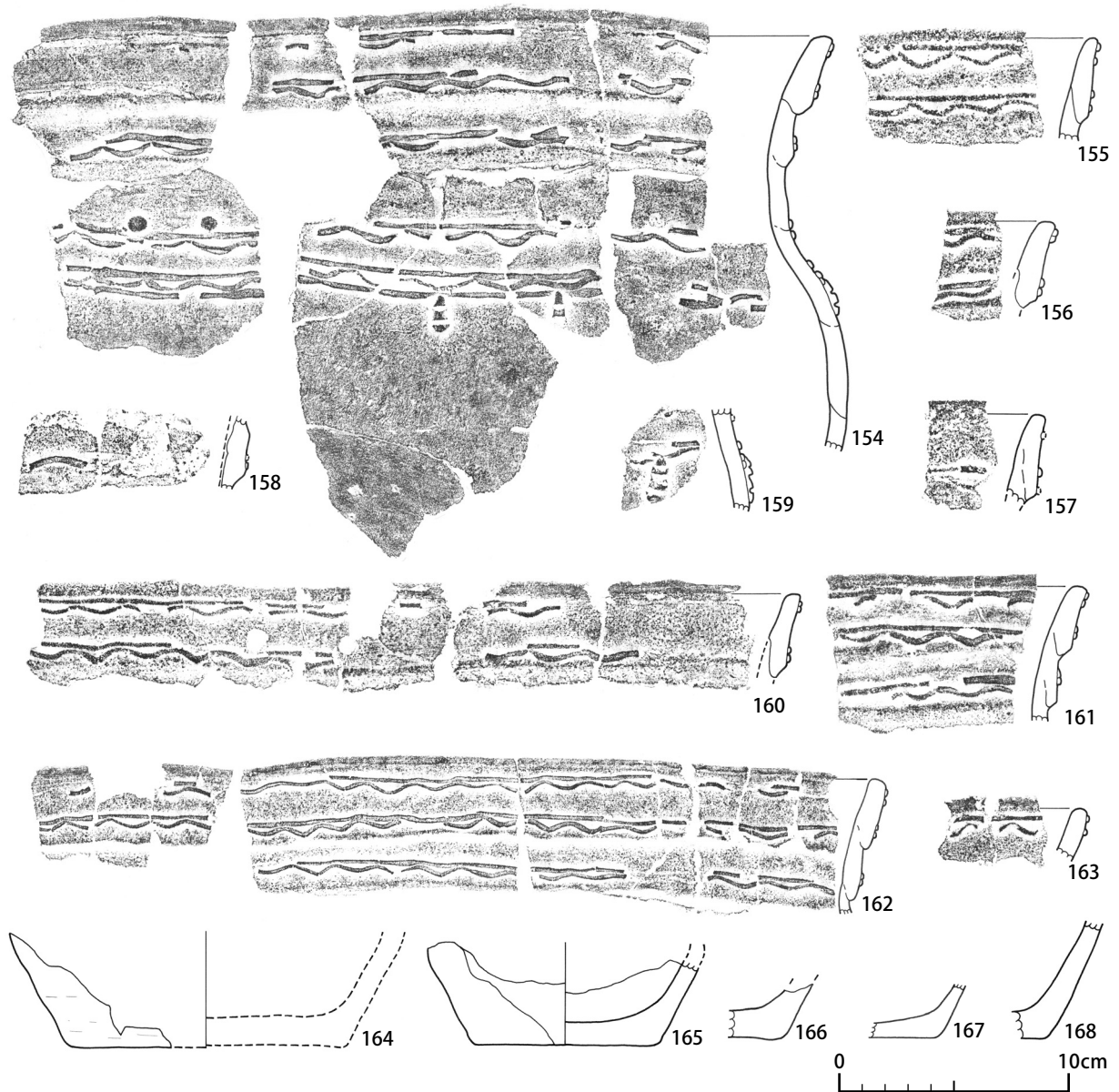


Fig. 118 9c号竪穴骨塚c出土の土器2

成されている。

111～127は縄文土器。111～121は後北C₂・D式土器である。111はOIの円形刺突文が施されており、北大I式の直前に位置づけられる。112～116・119は深鉢の口縁部破片で、116はⅢ層出土の破片を含む。117・118は注口土器の注口部である。120・121は底部破片で、底面が外に張り出す器形となっている。122は宇津内Ⅱb式土器で、山形突起を有する口縁部破片である。123は吊耳を有する口縁部破片で、IO突瘤文はないものの、口唇直下の貼付文が無い点からすると宇津内Ⅱa式土器とみられる。124・125は宇津内Ⅱa式土器。126は宇津内Ⅱ式の胴部破片。127は胴部破片で、原体RLの縄文を地



Fig. 119 9号竖穴床面出土の土器

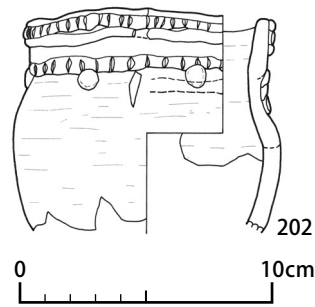


Fig. 120 9号竪穴住居外出土の土器

文とし、4歯の工具を用いて波状の櫛描文を2単位施している。縄文晩期後葉～元町2式に位置づけられよう。

128～132は縄文土器。128は鯨潤式土器、129～131は北筒式土器である。129は胎土に繊維を少量含み、口縁部に肥厚帯を有する。地文は原体RLRの縄文で、円形の刺突文とそれを下方に引きずった文様を有する。細岡式土器（豊原1996）であろうか。130は胎土に繊維を含み、口縁部には断面が三角形に近い肥厚帯を有する。地文は原体RLとLRの羽状縄文で、円形刺突文を有する。トコロ6類土器であろう。132は底部破片で、胎土に繊維をわずかに含み、地文の縄文（原体不明）の上に縦の沈線文が描かれている。132は無文の口縁部破片で、胎土に繊維を含む厚手の土器である。網走式土器であろうか。

⑥ 9c号骨塚c出土 (Fig.117・Fig.118)

133～168はオホーツク土器。133～144・146～163は貼付文系の文様を有する土器。145は遺存している部分については無文の土器である。164～168は底部破片。

133～136・154～163は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む完形ないし口縁部破片である。133は胴部に6本の貼付文からなる方形の単位文様を2単位施している。154～163は接合しないが全て同一個体とみられる。137～140は文様に2本1単位の貼付文を含む口縁部破片である。141～144は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。145は遺存している部分では無文の土器で、口縁部には突帯と1段の肥厚帯を有している。146～152は胴部破片で、そのうち146～148は文様に3本以上を1単位とする貼付文、149～150は2本1単位の貼付文を含み、151～153は文様が1本単独の貼付文で構成されている。

⑦ 9号床面出土 (Fig.119)

9号竪穴の床面から出土した土器であるが、調査の初期に一括で取り上げた等の理由で、9a号～9c号のいずれに属するかが判別できない資料をまとめた。

169～194はオホーツク土器。169～175・177～190は貼付文系の文様を有する土器で、176は刻文系と貼付文系の両方の文様を有する土器である。191～194は底部破片。

169～172は文様に3本以上を1単位とする貼付文、173～175・177は文様に2本1単位の貼付文をそれぞれ含む口縁部破片である。176は口縁部には2本1単位の貼付文、肥厚帯の下縁には先端が丸く太い工具で刻文が施されている。178・179は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片。180の口縁部は無文で、口唇上と胴部にそれぞれ1本単独の貼付文が施されている。181も口縁部は無文で、胴部には刻み目のある太い貼付文と、馬蹄形をした貼付文が施されている。182～190は胴部破片で、そのうち182・183は文様に3本以上を1単位とする貼付文、184～186は2本1単位の貼付文を含み、187～190は文様が1本単独の貼付文で構成されている。182は突帯状の太い貼付文の上に3本1単位の貼付文が施されている。186は胴部文様の下端に施された貼付文の一部がクランク状に曲げられている。

195～196は続縄文土器。195は後北C₂・D式土器。196はいわゆる帯縄文がやや崩れた形で施された胴部破片で、後北C₂・D式土器とみられるが確言はできない。

197～201は縄文土器。197は北筒式トコロ6類土器で、胎土には繊維が含まれる。198はやや厚手の無文土器で、胎土に繊維は含まれていない。網走式土器とみられるが同定は困難である。199は口縁部に突帯状の貼付文を有する土器で、胎土には繊維が少量含まれる。網走式土器であろう。200と201は胎土に繊維を含む厚手の土器で、縄文とみられる地文が施されているようだが細片であるためはっきりしない。縄文前期の土器とみられるが詳細は不明である。

⑧ 9号竪穴外出土 (Fig.202)

202は9号竪穴の外で出土したオホーツク土器。口縁部にごく薄い肥厚帯を有し、口縁部には3本1単位の貼付文、胴部には2本1単位の貼付文に粒状の貼付文を付加した文様が施されている。

(熊木俊朗)

3-2 石器

① 9a号床面出土 (Fig.121)

出土位置を記録した遺物(点取り遺物)は、石製ナイフ・スクレイパー3点、剥片2点の計5点である。

石製ナイフ・スクレイパー (Fig.121-1～3)

いずれも黒曜石製であるが、3には暗赤褐色が網状に入る。

1は薄身(5mm)の剥片を素材とした石匙である。背面両側縁に二次加工が連続し、腹面縁辺には不規則な形状の剥離痕が断続する。2は幅広剥片を斜位に用い、両側縁を中心として40°前後の比較的鋭い刃部を形成したナイフである。3は縦長剥片の側縁にやや急角度(60°前後)の刃部を作り出した削器である。主に右側縁背面側に二次加工が施されており、右側縁腹面側には縦方向の擦痕が顕著である。

② 9a号骨塚a出土 (Fig.122)

点取り遺物は、石鏃5点、両面加工尖頭器4点、石製ナイフ1点、剥片6点の計16点である。この他に石鏃2点がフローテーションによって検出されている。

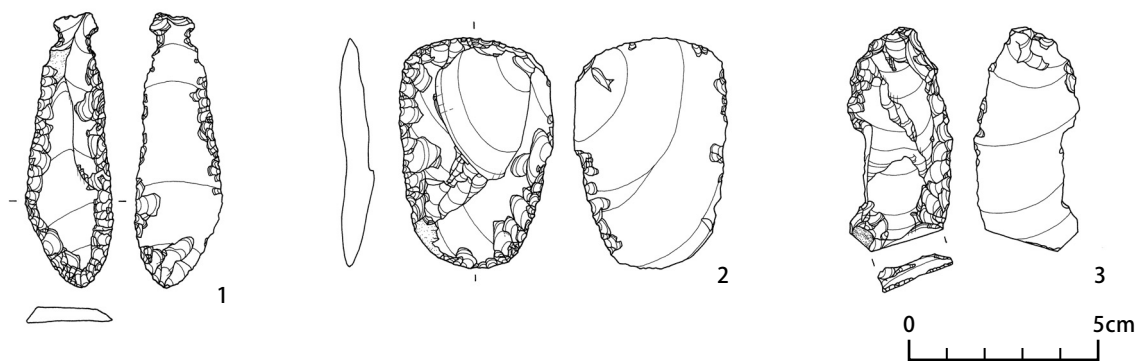


Fig. 121 9a号竪穴床面出土の石器

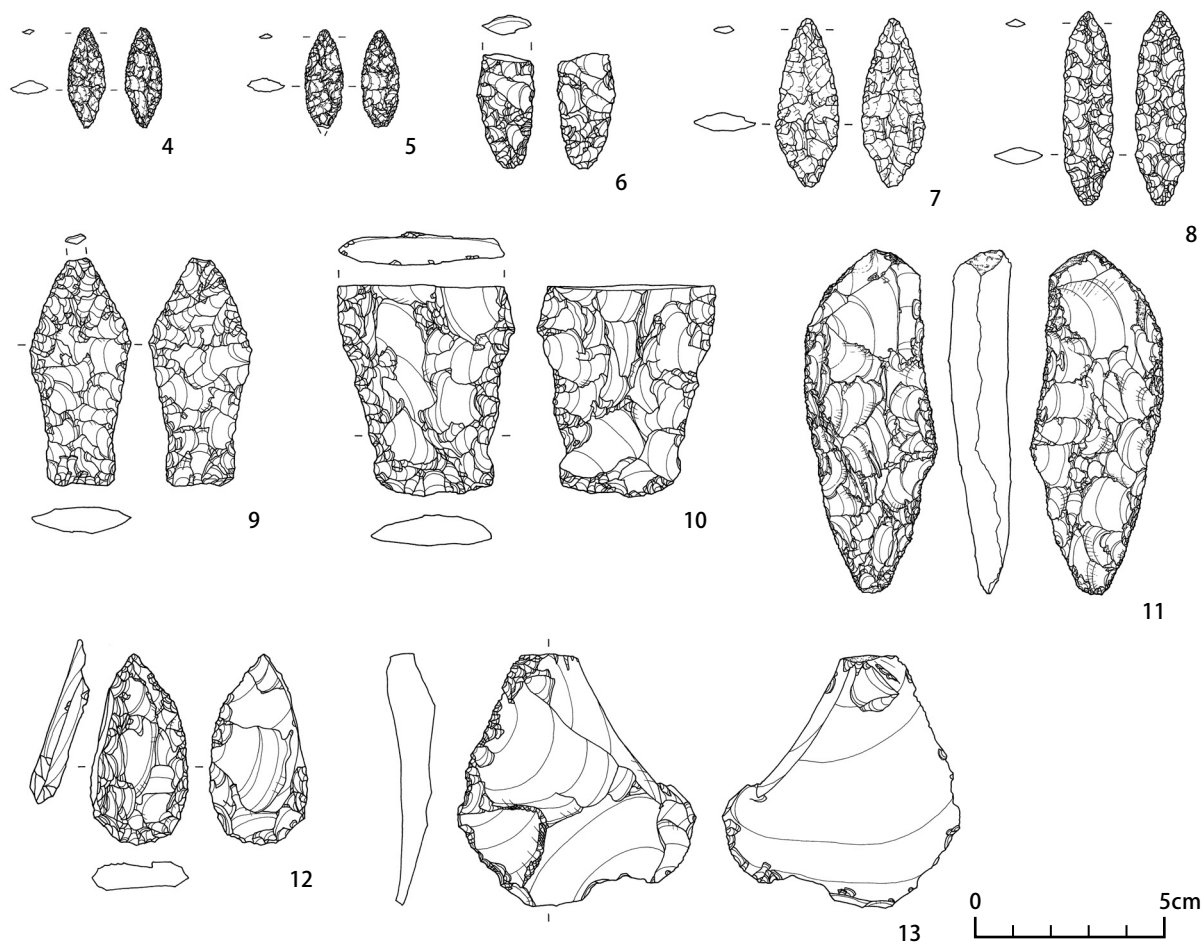


Fig. 122 9a号竪穴骨塚 a 出土の石器

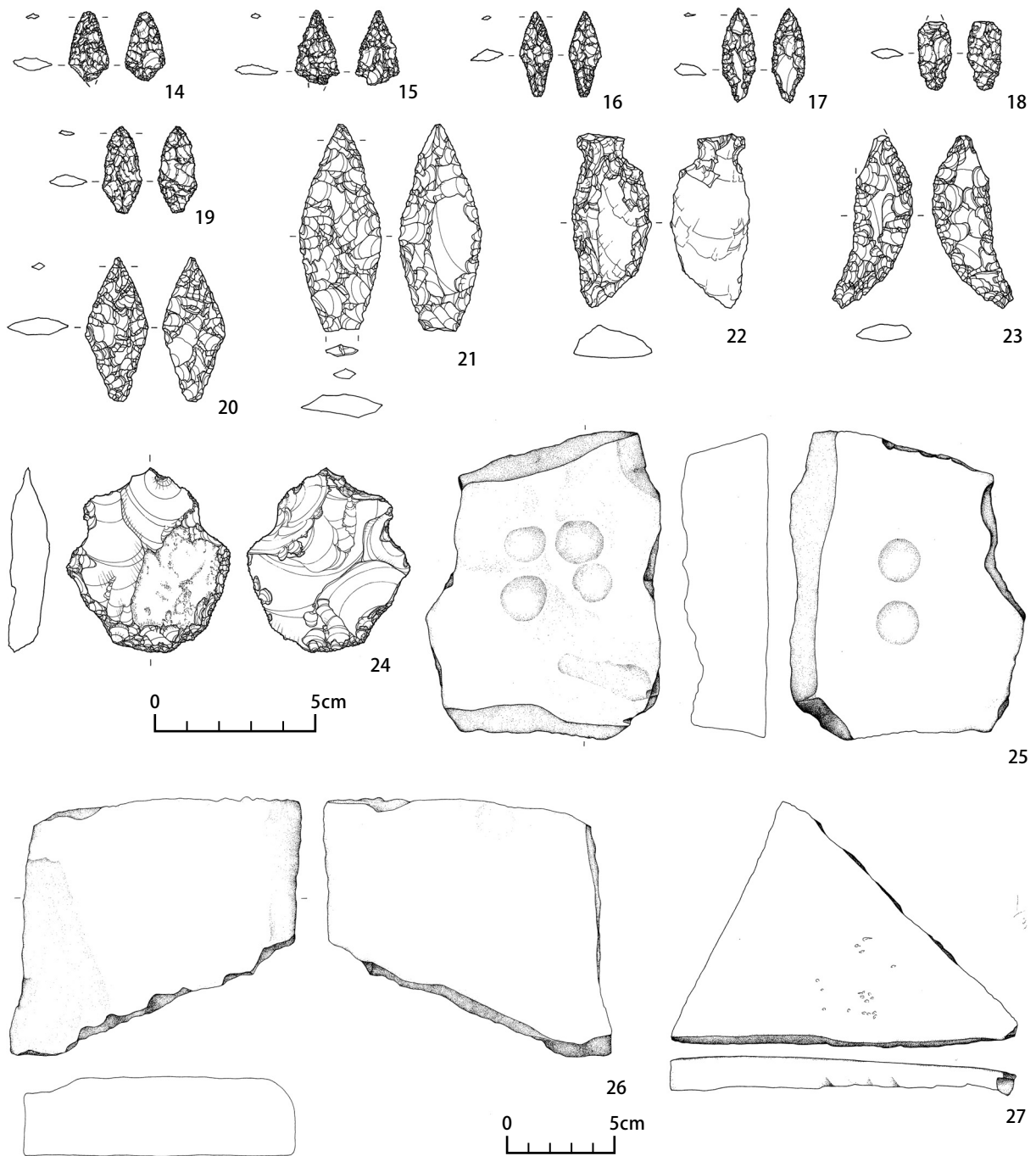


Fig. 123 9c号竖穴床面出土の石器

石鏃 (Fig.122-4 ~ 8)

頁岩の7以外は黒曜石製で、4・5はいわゆる梨肌の石質である。

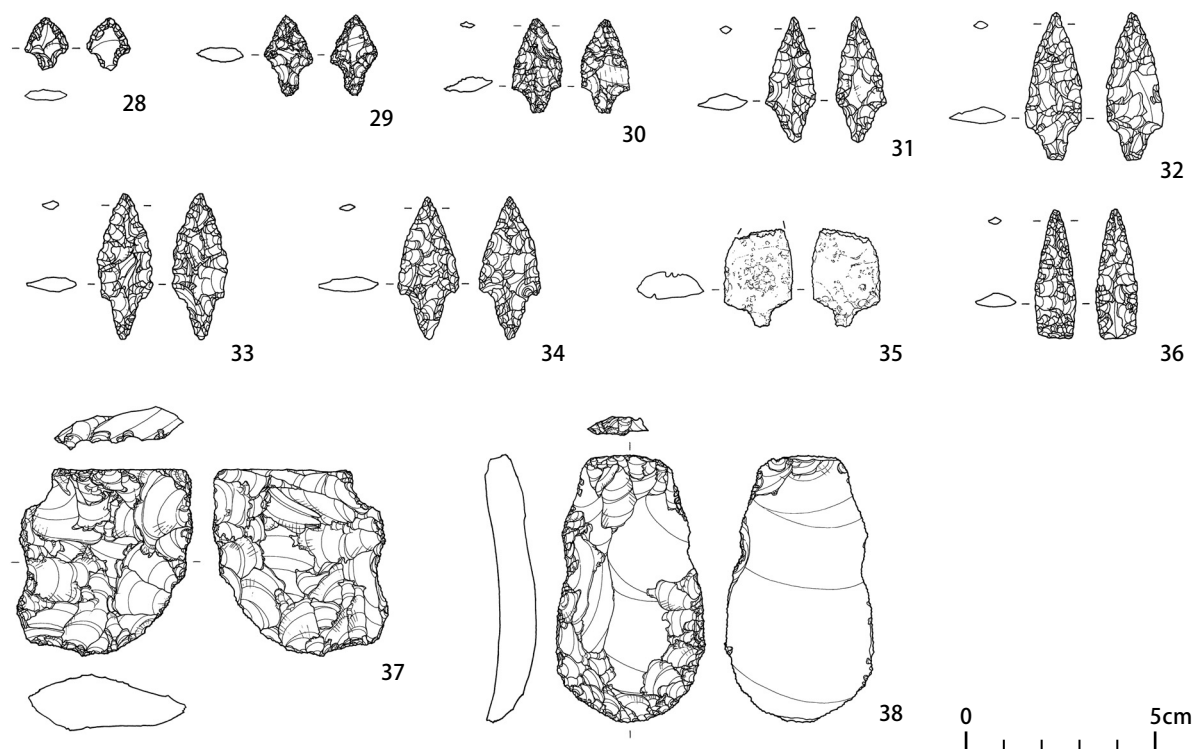


Fig. 124 9c号竪穴骨塚c出土の石器

長さ 2.5cm ~ 5cm、厚さ 3mm~5mm のサイズで、いずれもかえしおよび茎部の作り出しが不明瞭な形態である。4 ~ 7 は木葉形や柳葉形に近い全体形状を呈し、8 は平行する長い胴部を持つ。

両面加工尖頭器 (Fig.122-9 ~ 12)

いずれも黒曜石製であり、11 は暗赤褐色の部分を含む。9 は基部が区分される形態を持つ石銛であり、尖端部付近に稜線の摩滅がやや目立つ。10 もこれに近い形状と思われるが、非常に大形で平面形・断面形ともあまり整っていない。11・12 は未成品であろう。11 は、基部側が比較的薄く均整のとれた形状となっているものの先端部側には分厚く岩屑面が残る。12 では、左側面の折面からも両面への剥離が施されている。

石製ナイフ (Fig.122-13)

13 は暗赤褐色が網状に入る黒曜石を用い、亜角礫~亜円礫面を打面とする幅広剥片を素材とする。主に左側縁背面側に小剥離痕が連続するが、その形状は不規則である。

③ 9c号床面出土 (Fig.123)

点取り遺物として、石鏃 7 点、両面加工尖頭器 1 点、石製ナイフ・スクレイパー 3 点、凹石 1 点、台石 1 点、砥石 1 点、石製品 1 点、剥片 1 点の計 16 点が出土している。この他に、石鏃 2 点がフローテーションによって炉 c から検出されている。

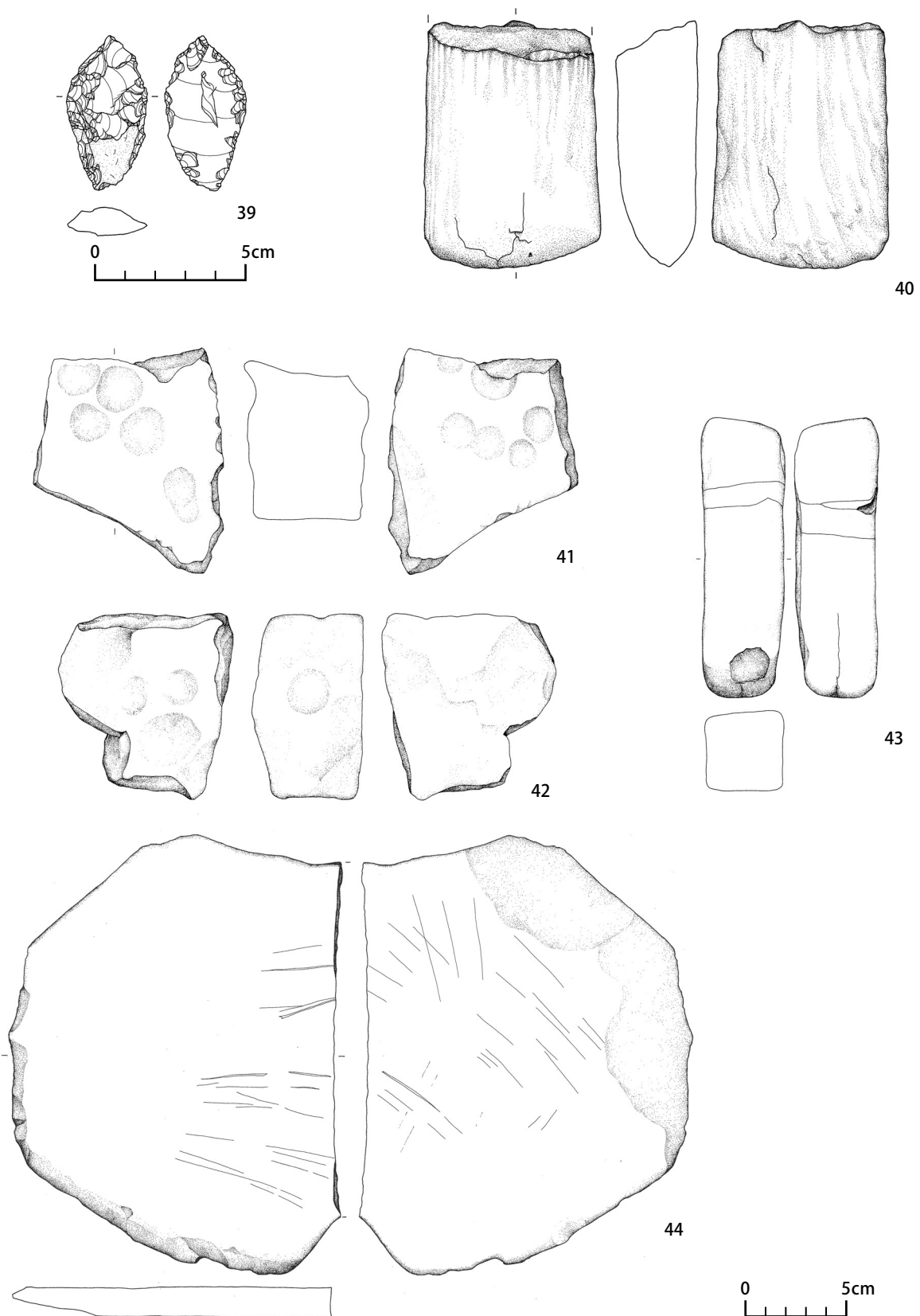


Fig. 125 9号竖穴埋土出土の石器

石鏃 (Fig.123-14 ~ 20)

すべて黒曜石製で、18・19は梨肌の石質である。また、15には僅かに暗赤褐色が入る。

長さ2cm～3cm、厚さ3mm～4mmの小形のサイズのものが多い。14・15は比較的明瞭な茎部と三角形の身部を持ち、後者の胴部には凹凸がみられる。16～20はかえしおよび茎部の作り出しが不明瞭で、特に16・20は菱形に近い全体形状を呈する。

両面加工尖頭器 (Fig.123-21)

21は梨肌黒曜石製の石槍である。裏面の加工がやや粗く、断面形が若干いびつである。

石製ナイフ・スクレイパー (Fig.123-22 ~ 24)

22は黒色頁岩製、23・24は黒曜石製である。

22はつまみ部にのみ両面への加工が施された石匙である。23の全体形状は不明であるが、三日月形の器体と刃角30°～40°の弧状の刃部を持つナイフである。24は、背面の右半分を角礫面に被われた厚身(14mm)の剥片を素材として弧状の刃部を備えた搔器である。最終的には腹面から小形の横長剥片が剥離されており、石核に転用されたものかもしれない。

礫塊石器 (Fig.123-25 ~ 27)

25は砂岩製の凹石である。厚さ4.5cm程度で表裏に凹みがあるが、裏面は平坦な磨面を伴い、上下左側面は割面である。26は幅13.5cm、厚さ4cmの砂岩製の台石で、上下を欠損する。正面・裏面ともに平坦であるが、敲打痕や剥落痕に被われており、裏面上端には弱い凹みが1ヶ所認められる。27は厚さ1.8cmの扁平な砂岩製の砥石である。正面に滑らかな研磨面が形成されているのに対し、裏面は粗い割面となっている。

④ 9c号骨塚c出土 (Fig.124)

点取り遺物は、石鏃9点、石製ナイフ・スクレイパー2点の計11点である。この他にフローテーションによって検出された石鏃10点、石製ナイフ1点を加えると合計22点となる。

石鏃 (Fig.124-28 ~ 36)

頁岩の30・31以外は黒曜石製であるが、35は被熱によって発泡し著しく変形している。また、32は梨肌の黒曜石である。

主に長さ2cm～4cm、厚さ3mm～5mmのサイズからなるが、特に1は剥片の縁辺に加工を施した非常に小形(長さ1.3cm、厚さ2.5mm)の石鏃である。有茎の形態を基本とし、胴部と尖頭部が五角形状をなすもの(30)、胴部が凹凸をなすもの(33)、胴部末端(かえし)が突出するもの(31)、もしくはこれらに近い形状のものが組み合わさる。

36は無茎平基の石鏃で長身の五角形状である。細かな二次加工によって整形され、滑らかな縁辺に仕上がっている。

石製ナイフ・スクレイパー (Fig.124-37・38)

いずれも黒曜石製である。37は両面加工によって弧状の刃部を作り出しているが、全体的に剥離が粗く細かな調整による縁辺の整形に乏しいため未成品であろう。上端の折面からも正面に剥離が加えら

れている。38は端部に弧状の刃部を備えた搔器である。縦長剥片を素材とし、背面末端および両側縁に二次加工が施されている。腹面側に湾曲し厚みのある刃部形状を呈する。

⑤ 9号竪穴埋土出土 (Fig.125)

竪穴埋土の比較的床面近くから出土し位置を記録した点取り遺物は、両面加工尖頭器1点、スクレイパー1点、石斧1点、凹石2点、砥石2点、剥片1点の計8点である。

スクレイパー (Fig.125-39)

39は側縁にやや急角度(60°前後)の刃部を作り出した黒曜石製の削器である。背面下半に円礫面を残しつつ両側縁に二次加工が連続し、腹面縁辺には不規則な形状の剥離痕が断続する。

石斧 (Fig.125-40)

40は砂岩製の石斧である。均整のとれた両刃の刃部と横断面楕円形の器体を持つが、風化の進んだ粗い石質のため研磨痕は不明瞭である。

礫塊石器 (Fig.125-41～44)

41・42は砂岩製の凹石である。いずれも表裏に作業面を持ち、厚さ5.3cm～6.5cm程度である。41の側面はすべて割面であるが、表裏に多数の凹みを持つ。42は正面と右側面に凹みがあり、裏面には比較的滑らかな磨面が残る。43は砂岩の細長い垂円礫を素材としたと思われる砥石である。研磨によって正面と左右側面が弱くくぼみ、裏面には煤やサビ様の付着物、下面には敲打痕が顕著である。44は厚さ1.6cmの扁平な砂岩製の砥石である。表裏に研磨面を持ち、幅4mm以下、深さ1mm以下の線状痕が多数認められる。

(山田 哲)

3-3 骨角器

① 9a号床面出土 (Fig.126-2～4)

2・3は雌形I類銚頭の破片である。2の尾部端はわずかに突起がみられる。4は大型の釣針軸破片である。結合用の平坦面をもつが、全体に加工が粗く糸掛けの突起などをもたないことから、未成品の可能性はある。

② 9a号ないし9b号床面出土 (Fig.126-5)

5は完形の雌形I類銚頭で、先端部に稜をもつ。

③ 9c号床面出土 (Fig.126-6～8)

6は焼けて湾曲が著しいが、完形の棒状製品II類である。下端はへら状に加工している。7・8は掘具である。7は突起をもつ破片だが、割れ口からみて基部端ではなく側縁中間部であろう。8はほぼ完形で基部端のみに突起をもち、突起上に刻みをいれてΣ字形にしている。

④ 9c号骨片を含む焼土出土 (Fig.126-1)

1はほぼ完形の雄形銚頭である。逆鉤は両側2段でほぼ同位置につくが、完全に左右対称ではない。先端には石鏃を装着するための刃溝を設ける。下段の逆鉤の肩部が2段の波状になっている。索孔は縦

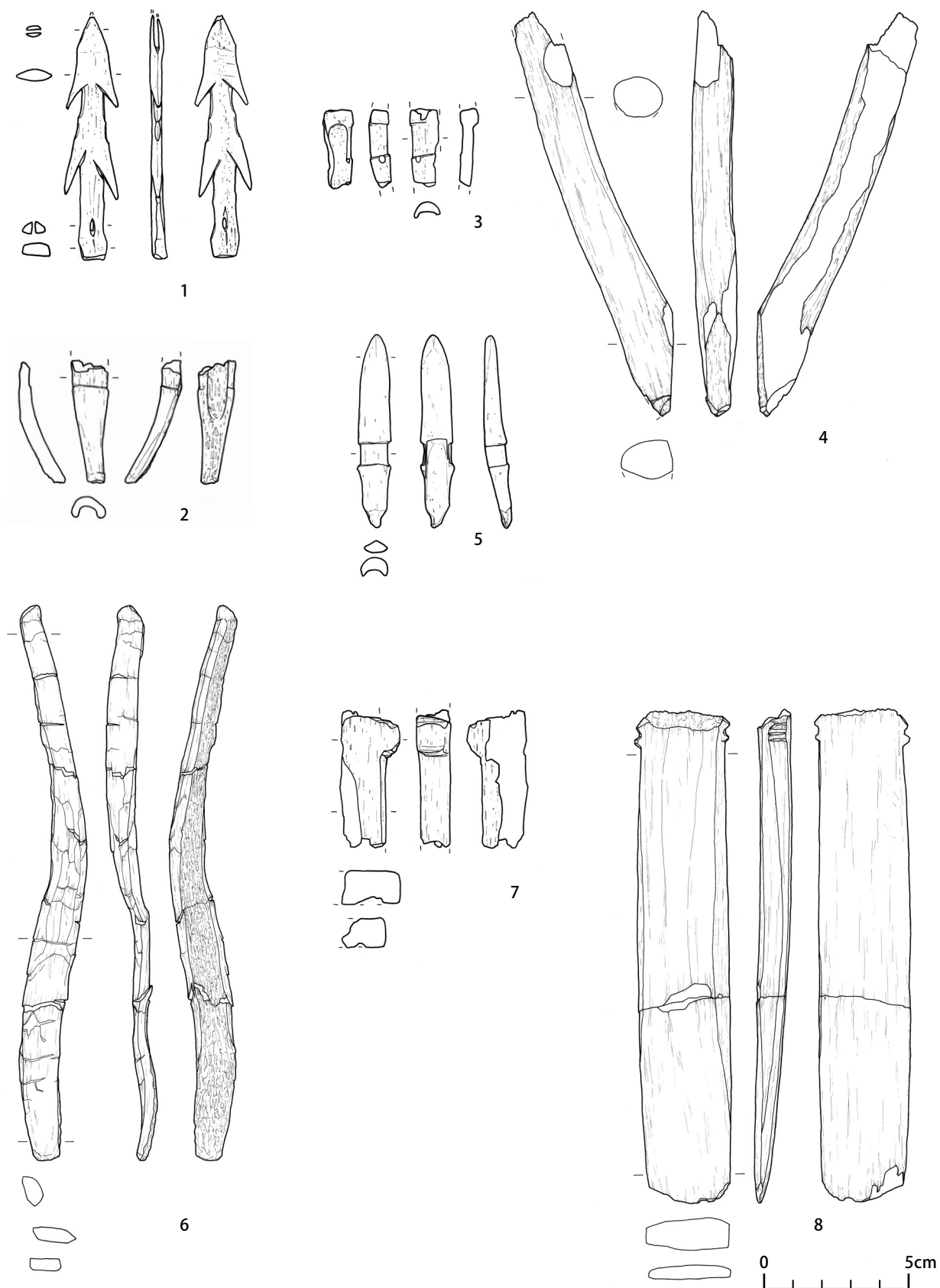


Fig. 126 9号竪穴出土の骨角器 (2~4: 9a号床面、5: 9a号ないし9b号床面、1・6~8: 9c号床面)

に細長いスリット状である。

(高橋 健)

3-4 木製品 (Fig.127)

1は、IV層出土の下端が尖った木釘状のものである。2～6は樹皮製松明と思われるものである。2は9号床面、3は9c号竪穴、4はIV層、5は9b竪穴床面、6はIV層出土である。これらはすべて当竪穴住居跡に伴うものと考えてよいであろう。

(宇田川洋)

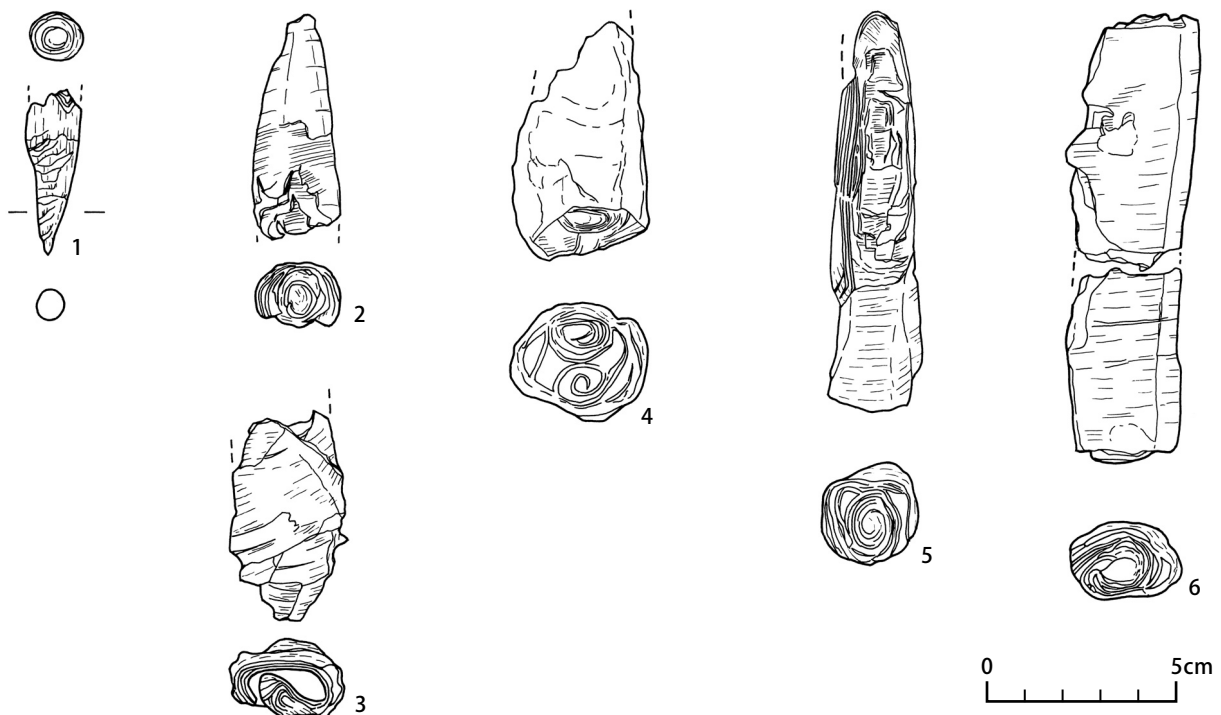


Fig. 127 9号竪穴出土の木製品

3-5 金属器

① 9c号床面出土 (Fig.128-1～2)

1は貼床直上から出土した鉤状の鉄製品である。ほぼ完形である。基部は無理やり折り返しており、破損している。先端には返しもなく、また尖っていない。また断面形はやや扁平な長方形であることから、釣り針としての機能と言うよりは、「何かを引っ掛ける」鉤としての機能を想定したい。トビニタイ遺跡2号竪穴(駒井編1964)から出土した「鉤状鉄器」よりも一回り大きい、同じような用途で

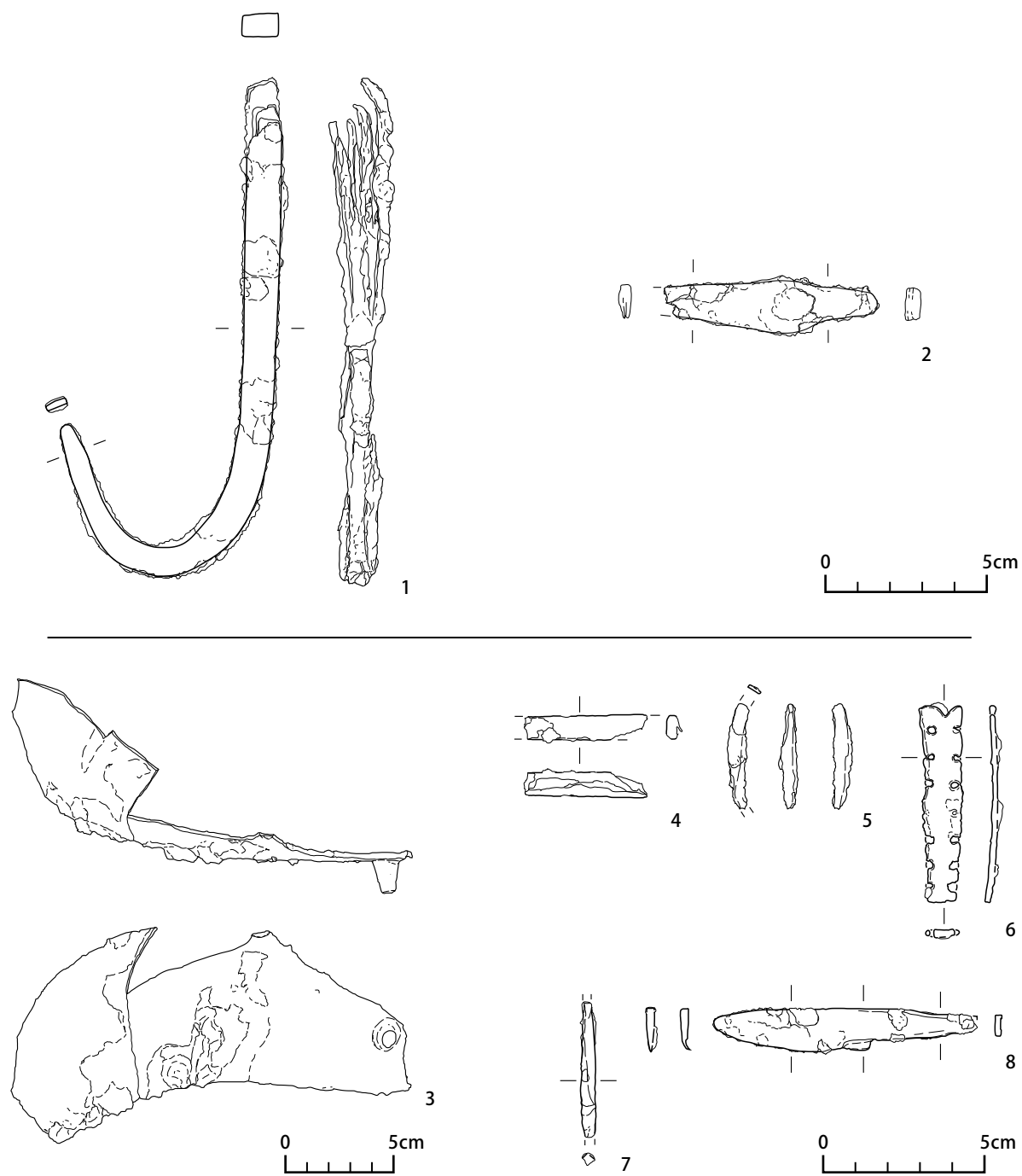


Fig. 128 9号竪穴出土の金属器（1～2：9c号床面、3～8：9号埋土）

使用されたと思われる。2は骨塚の周辺から出土した刀子である。珍しく棟側にも区が設けられており、いずれも撫角の両区の刀子である。錆び方が他の刀子と異なるため、成分や製作技法に違いがあるのかもしれない。

② 9号竪穴埋土出土 (Fig.128-3～8)

3はI層(ア区)から出土した鉄鍋である。遺存状態が悪いため、径を復元することはできなかった。脚が一つ確認されている。湯口は不明である。大きさから判断すれば、おそらくは3脚の吊耳鉄鍋の破片であろう。

4はII層(ウ区)から出土した鉄製品である。大半を欠損しているため、詳細は不明である。5はII層(ウ区)から出土した鉄製品である。やや弧を描くが、両端を欠損するため、全体の形は不明である。断面は扁平な長方形である。

6はIII層(エ区)から出土した、小札の再加工品である。もともとは碁石頭の伊予札(孔は2×7)であったものを、わざわざ孔の位置に合わせて縦に切断したものである。何らかの装飾品であった可能性が考えられる。

7はIV層(ウ区)から出土した鉄針である。両端を欠損しているため、天地は不明である。断面の形状は方形～円形と定まっていない。

8はIV層(ウ区)出土のほぼ完形の片区の刀子である。茎部分の上下には鍛打によって成形した痕跡が残る。断面を見ると、刃部は片刃に近い偏心の両刃である。茎尻は斜めに切断されている。刃区の部分が奇妙な形状をしている。撫角の区を作出する際に、折り返すべきところを途中で止めてしまったような形状である。未製品の可能性を指摘できる。

(笹田朋孝)

4 小括

9号竪穴では3軒(9a号・9b号・9c号)の竪穴がほぼ入れ子状になるかたちで重複して検出された。炭化材の遺存状況や周溝の切り合いから、建て替えは基本的に古い住居を縮小してゆくかたちで2回おこなわれていたことが判明したが、その際、2回とも長軸をわずかに時計回り方向に回転させていることが確認された。7号や10号の建て替えにはない特徴といえよう。また、9a号・9b号・9c号はいずれも廃絶時に火を受けた焼失住居であったことが確認されたが、住居の構造材や木製品などの炭化木材は蒸し焼き状態にならず焼失してしまったためか、7号・8号はもとより10号と比較しても9号のそれらは残りが悪かった。

9a号・9b号・9c号ともに出土遺物は多数にのぼるが、ここでは以下の3点について注目しておきたい。1つは第三章第九節の分析結果のとおり、9a号と9c号で検出された骨塚aおよび骨塚cの内容が貧弱であった点で、特にヒグマの骨がほとんど出土していない点はやや特異といえる。第2は骨塚aに伴って出土した続縄文土器(宇津内II b式土器)である。これは出土状況からみても偶然の混入ではなく、

第二章 遺構各説

居住者によって意図的に骨塚 a の上面に置かれたものとみられる。同様の例は 7a 号竪穴の骨塚 a と 10c 号竪穴の骨塚 c でも確認されており、本遺跡群のオホーツク文化竪穴では度々みられる行為といえる。第 3 は 9a 号・9b 号に伴うオホーツク土器の中に筆者の言う「沈線文期」の資料がやや目立つ形で含まれていた点である。これに関しては、9a 号・9b 号の上限時期が沈線文期までさかのぼることを示すと考えられなくもない。しかし両竪穴の土器群の主体は貼付文系土器であり、しかも型式学的に古手の貼付文系土器のみで構成されているわけではない。すなわちこの想定は 9a 号・9b 号竪穴の存続期間を不自然に長く想定することになり、無理が生じる。本遺跡群のオホーツク文化沈線文期に関しては、これまで竪穴は発見されていないが土器は出土しており、墓の存在も推定されている（熊木 2003）。よってここでは 9a 号・9b 号の存続期間を長く（上限を古く）考えるのではなく、沈線文期の資料は竪穴内に混入したものと考えておきたい。9 号竪穴で他の竪穴より沈線文期の土器が目立つ点については、沈線文期の活動の中心が本竪穴に近い地点にあったことを示唆していると解釈できる可能性がある。

（熊木俊朗）

註

- 1) このような推理は、9a 号の時期の炉が炉 c や炉 ab よりも西側にずれた位置に存在していたことを前提として導き出されている。しかし実際にはその位置に炉の痕跡は確認されていないため、この推理には多少の疑問が残る。
- 2) 長軸の位置や方向の変化を見ると、本文でも述べたように、9a 号から 9b 号への建て替え時と、続く 9b 号から 9c 号への建て替え時とではどちらもわずかに時計回りに振れているのみで、前者の変化の方が目立って大きいわけではない。これらの点を勘案するならば本文のような結論でなく、本文で最初に述べた、炉 ab が 9a 号、炉 c が 9b 号と 9c 号に対応するという説が成り立つ可能性も考えられる。
- 3) 第三章第九節でも、炉 ab 出土の海獣骨については本文のような状況を踏まえて帰属時期の下限となる 9c 号の時期として扱っている。
- 4) このように出土遺物が 9a 号と 9b 号のどちらの床面に属するかわからなくなってしまった直接的な理由は、床面出土遺物の全点について詳細な出土位置の記録をしなかったという判断ミスによる。特に、発掘調査の進行過程で 9 号竪穴の建て替え回数が 3 回であると確実に認識される以前は、「内側炭化材列の外側（すなわち、9c 号より外側の 9 号床面）」として一括で取り上げていた資料もあったため、これらの資料の一部で 9a 号・9b 号のいずれに伴うのか判断できない例が生じた。

引用文献

- 熊木俊朗 2003 「第 3 章第 1 節 オホーツク墓出土の遺物（畠山三郎太氏寄贈資料）」『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学常呂実習施設：22-30
- 熊木俊朗 2009 「第 6 章第 1 節 1 オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会：303-319
- 駒井和愛編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部

豊原熙司 1996 「北筒式土器の型式認識について」『北海道考古学』32：35-47